

# 朝鮮通信使(中世編)

吉田光男／田代和生・六反田豊・伊藤幸司・橋本雄・米谷均

- 一、はじめに―「通信使」の定義
- 二、通信使の役割
- 三、日本滞在中の朝鮮通信使
  - 1、通信使に対する接待・警固
  - 2、幕府の外交儀礼と対外觀(朝鮮観)
  - 3、朝鮮通信使の日本観察
  - 4、文化交流
- 四、朝鮮通信使の途絶理由
- 五、今後の研究課題
  - 1、朝鮮国使節の総合的研究
  - 2、北東アジア史における「朝鮮外交秩序」の問題
  - 3、通信使構成員の格付けと政治的立場
  - 4、通信使をめぐる日本国内の問題

## 一、はじめに―「通信使」の定義

中世・近世を通じて、朝鮮国から日本へ「信を通(かよ)わす使者」が派遣されたことはよく知られている。これを日本側では「朝鮮通信使」ないしは「通信使」と呼ぶが、朝鮮王朝側では日本への使節を「日本国通信使」「報聘使」「回礼使」「回礼官」「通信使」「通信官」などとし、行き先・目的・編成も一様でない。最初に「通信使」という名の使節が日本国王へ派遣されたのは、倭寇禁圧の要請を行ったとされる高麗時代1375年(正使:羅興儒)のことで、朝鮮王朝時代が初めてというわけでもない。

研究者によっても、通信使の捉え方は異なる。たとえば中村栄孝は、1428年に派遣された通信使(正使:朴瑞生)を最初の通信使だと見なし〔中村栄孝1966〕、また田中健夫は、太宗時代(在位1400～18年)には「回礼使」、世宗時代(在位1418～50)以後は「通信使」を派遣して日本に応えたとする〔田中健夫1975〕。これに対して、中世・近世の通信使を初めて通観した三宅英利は、1428年以前の「通信官」と呼ばれる朝鮮使節が未検討であると指摘し、「通信使」と見なせる条件を以下の5点に集約した〔三宅英利1986〕。

- ①朝鮮国王から日本将軍(「日本国王」)に派遣されたもの
- ②日本将軍に関する吉凶慶弔、または両国間に緊急な問題の解決を目的とし、回礼・報聘の意義を有しないもの
- ③朝鮮国王より日本将軍宛ての外交文書および贈品リストを携行するもの
- ④中央官人の三使(正使・副使・書状官[近世段階の従事官])以下で編成されるもの
- ⑤通信使、またはそれに擬する国王使の称号を有するもの

三宅によると、これらの条件すべてに適合する通信使の初見は1413年(正使:朴賁)であるが、この使行は慶尚道で中止されて完結しなかったため、名実ともに最初の通信使と呼べるのは1428年(正使:朴瑞生)のものであるとする。ただしこの原初形態としては、1397年の通信官(正使:朴惇之)・1408年の通信官(正使:朴和)があるが、前者は大内氏への回礼使で一行の編成人員も不明であり、また後者は使行内容が不明なのと呼称の点からみて、いずれも通信使と認定できないとしている。

そこで厳密な意味で、中世(朝鮮王朝前期)の通信使と認定できるのは、以下の6回の使行であるとしている。

- ① 1413年派遣 正使:朴賁(他の構成人員不明)、(慶尚道で使行中絶)
- ② 1428年派遣 正使:朴瑞生、副使:李芸、書状官:金克柔
- ③ 1439年派遣 正使:高得宗、副使:尹仁甫、書状官:金礼蒙
- ④ 1443年派遣 正使:卞孝文、副使:尹仁甫、書状官:申叔舟
- ⑤ 1459年派遣 正使:宋処儉、副使:李従実、書状官:李覲(海上事故で行方不明)
- ⑥ 1479年派遣 正使:李亨元、副使:李季全、書状官:金訢(対馬で正使死亡、中止)

このうち京都へ到着し、室町将軍の引見を受けて使節としての任を全うできたのは、3回(②・③・④)(いずれも世宗時代)だけである。

ただし朝鮮国王から日本国王へ宛てた使節は、「通信使」以外に「回答使」「通信官」「報聘使」「回礼官」などの呼称のものが10回以上も確認される。江戸時代初期3回の「回答使兼刷還使」(→「朝鮮通信使(近世編)」研究史を参照)が、「通信使」扱いにされていることを考慮すると、全体を通じた議論がまだ不足しているように見える。

## 二、通信使の役割

朝鮮王朝が通信使を派遣した最大の理由が、倭寇対策、すなわち幕府への倭寇禁圧要請にあったことはいずれの研究者も認めるところであるが、通信使全体を通観した役割・意義づけについては、日本側の研究はまだ充分ではない。個別事例的な研究としては、〔三宅英利1986〕が通信使と明朝へ派遣される燕行使を比較し、たとえば1413年使行の正使朴賁が参議であったのに対し、

この頃の燕行使には王族があたっていたことから、通信使は燕行使よりも低位の官人が任じられていたのではないかと推測している。[高橋公明1982]は、室町幕府弱体観が朝鮮王朝の根底にあり、そこから室町幕府(日本)に対する低い位置づけがなされたのではないかと論じている。なお、1443年の通信使に随行する申叔舟の死(1475年)後、朝鮮王朝の日本観に大きな影をおとした経緯については後述する。

1439年の通信使正使の高得宗に焦点をあてた[高橋公明1990]は、人物史の面から中世通信使の役割を追求している。これによると、高得宗は高麗末の済州島星主の系譜で、この時期に済州島出身者で堂上官にまで昇ったのは彼のみであり、1438年に続き1441年にも燕行使として明朝にも赴いたという。ただし2回目の燕行使のとき、独断で女真族の酋長鎮圧を明朝に要望したり、朝鮮国王の糖尿病と眼病の薬を請求したことが罪に問われ、帰国直後、投獄・配流されたという。

通信使が、対馬島との間で交わされた約条の締結にどこまで関与していたかについては、これまで様々な論議がなされている。たとえば、1443年に対馬島主と朝鮮王朝との間に通交貿易規定である「癸亥約条」が定約された時、同じ年に派遣された通信使(正使: 卞孝文)との関係はまったくなかったとしたのが、[瀬野馬熊1915][中村栄孝1969]らの研究である。この約条の直接の交渉役は、「体察使」の名目で対馬島へ派遣された李芸らであったという。しかし[長節子1990・2002a]によると、対馬島民が孤草島(現在の巨文島か[長節子1979])での漁業継続を要請した「孤草島釣魚禁約」(1441年成立)に、1443年の通信使が強い関心を示し、国王への帰朝報告で禁約成立に至るまでの情報を流していたことが明らかにされている。その情報とは、前回の通信使(1439年)正使の高得宗と島主宗貞盛との対談にかかわるもので、漁業権継続を願う対馬側に対し、高得宗が数量を定量化して許諾してもらうという策を与えたというもので、実際には日本・朝鮮関係に重大な影響を及ぼしかねない対馬との約条締結に通信使は無関係ではあり得なく、時には前回の通信使の言動にさえ注意を払っていたことが実証されている。

### 三、日本滞在中の朝鮮通信使

#### 1、通信使に対する接待・警固

日本の京都に赴く朝鮮使節(通信使のみならず回礼使・報聘使なども含む)に関する総合的・通史的な研究としては[仲尾宏1986]があり、使行表・贈答品表などが明らかにされている。さらに三宅英利によれば、通信使は日本国王(室町将軍)やその周辺のみならず、対馬宗氏・少弐氏・大内氏など九州の有力者へ対し、礼曹からの書契や礼物を送ることを慣例としていたと指摘する[三宅英利1986]。三宅によると、この措置は同時に航路の安全を要請するためであり、その警固が各守護大名に期待されていたことになる。ところが、1443年の通信使(正使: 卞孝文)一行は、対馬から赤間関へと順調に進んだものの、尾道で將軍御教書がないことを理由に警固(護送)してもらうことが叶わず、自力で兵庫へたどり着くなど、常にその行程には不安要因がつきまとっていたという。

京都に入るまでの状況については、[仲尾宏1989][伊川健二2000a][橋本雄2000a]らの研究によって判明する。これによると、同じく1443年通信使の事例によると、通信使は兵庫で幕府からの

入京許可の通達を待つが、幕府有力者は「支待」(使行の支援と待遇・接待)の費用がかさむことから、通信使の入京を積極的に望まず、「諸国役国役出銭」できないことを理由に、通信使の入京を拒否する動きを示したという。ここにいう「諸国役国役出銭」なるものの具体的内容や実施プロセスについては史料上まったく不明であるが、**〔橋本雄2002a〕**の推論によると、①1443年6月、「先規の通り」と称して斯波氏が使節の接待費を負担している例があること。②この「先規」の例として、朝鮮使節の日本紀行文である『老松堂日本行録』に散見する甲斐氏(斯波氏家臣)による朝鮮使節の接待事例を想定できること。③やや遡るが、1375年に守護赤松義則から矢野荘へ、人夫・伝馬役や警固役が命じられた例(**〔関周一1995〕**)があること。以上のことから幕府は諸大名から「国役出銭」を募り、通信使の来日にそなえて接待費や人夫・伝馬役、警固役などに宛てていたと想定している。また**〔高橋公明1985〕****〔橋本雄2000b〕**によると、入京拒否に遭いそうになった通信使卜孝文らは、使行の目的のひとつである前主義教の弔意を強調してその場を切り抜け、結果的に幕府の入京許可を得ることに成功したとされる。江戸時代に比して、中世の通信使は、道中や入京に至るまでの安全が確保されておらず、かなり不安定な状態にあったことが判明する。なお**〔伊藤幸司2002d〕**によると、京都における通信使の宿所は、一貫して寺院であったことが指摘されている。

## 2、幕府の外交儀礼と対外観(朝鮮観)

来日した通信使の入京拒否は、経済的なことだけが理由に挙げられるわけではない。それら拒否の言い訳(弁明材料)の中から幕府の対朝鮮観を伺うことができる。**〔三宅英利1986〕****〔田中健夫1959・1995b〕**によると、1443年通信使使行の際、幕府は当代随一の学者、清原業忠(公家、大外記)の意見を採用し、「上古」日本に「来朝」(朝貢)した「高麗」(高句麗)などの外交文書と、今回の通信使が携えてきた朝鮮国王の国書(書契形式)との書式がひどく違うことを理由に、追い返そうとしたことが指摘されている。室町幕府の要人および周辺のブレインたちのなかに、旧態然とした朝鮮蔑視観や神国思想の存在を読みとる研究者は数多い**〔中村栄孝1965〕****〔三宅英利1982・1986〕****〔村井章介1988a〕****〔関周一1997a〕****〔橋本雄1997a〕**。

国書や礼物の受授に関する儀礼に関しても、史料が少ない。原則として、国書が臨濟宗の寺で外交文書の起草などにあつた蔭涼軒に収納されたこと**〔仲尾宏1994〕****〔橋本雄1997a〕**が明らかになるくらいである。通信使の将軍への接見などの状況は、**〔関周一1997a〕****〔伊藤幸司2002d〕**に整理されている。これによると、義満(1368～94年)・義持(1394～1423年)期の室町殿(日本国王)は概して寺院などで朝鮮使節を引見し、義教(1429～42年)期になると、いわゆる室町邸(殿)で引見するようになるという。これは、当初から室町殿が自邸で直接謁見した明使節への待遇と較べると、大きな格差があつたといえる。

接見における坐位のあり方については、1443年の通信使正使の卜孝文が、管領畠山持国(幼少将軍足利義勝の代理人)と京都の相国寺で対面した時の‘坐位論争’が有名で、そこから幕府内外や周辺の朝鮮観に対して、研究者の間で論争が行われている。これは、会見の当事者である幕府奉行人飯尾貞連(大和守)が管領北側・使者東側を主張したのに対し、通信使側が使者東側・管領西側を主張し、妥協案として管領東側・使者西側によって会見が行われた一件である。こ

の経過から、まず[村井章介1982]は朝鮮を一段下の位置に置こうとする伝統的外交観が幕府内部に存在していたことを指摘した。しかし高橋公明はこれに反駁し、飯尾貞連が最初に管領北側を主張したのは、あくまでも管領が幼少将軍(義勝)の代理だったからで、むしろここからは卜孝文が管領を将軍の代理人と認めなかったことを読みとるべきであり、最終的な妥協案は非常に現実的な提案であり、そこに伝統的な朝鮮蔑視観を認めることはできない、とする[高橋公明1985]。しかし村井は、再度自説を展開し、使者が代理を認めなかったという高橋説には史料的根拠がなく、『朝鮮王朝実録』にあるように、卜孝文が最初の飯尾貞連の坐位提案に反対した理由として、‘日朝の対等(敵礼)関係’に違反していたためだとする[村井章介1988b]。すなわち通信使(国王使)は朝鮮国王の代理であり、管領も日本国王(将軍)の代理であるから、これからみても、幕府内部に朝鮮蔑視観があったことは再確認されるとする。

### 3、朝鮮通信使の日本観察

朝鮮通信使の重要な任務として、相手国日本の国情探索がある。室町時代、日本に使行した朝鮮使節の日本観察記録を考察した[関周一1999]は、帰国後の復命書の提出が義務化されていたのではないかとしている。近世と異なり、当該期の通信使の日本使行記録はあまり残っていないが、たとえば1440年の通信使(正使:高得宗)の出発前の事目のなかに、「一、凡聞見事件、令従事官日記載録、回還啓達(見聞きした事柄についてはすべて従事官に逐日記載させ、帰朝後、国王に報告する)」「(『世宗実録』)とあり、帰朝報告を提出したことは恐らく間違いないとされている。

通信使の日本観察記録で最も著名なのが、申叔舟著『海東諸国紀』(1471年)である。著者は、1443年通信使の書記官として訪日した経験をもち、本書は領議政兼礼曹判書のときにまとめられたもので、日本および琉球の研究書として知られている[中村栄孝1965・1966][田中健夫1991]。ただしこの『海東諸国紀』の形式や内容には、それ以前の通信使による見聞録が反映されているという。[秋山謙蔵1935][三宅英利1986]は、1428年通信使(正使:朴瑞生)による広汎な日本国内情報の収集をあげ、倭寇の出身地および地方諸侯との関係や室町政権の弱体性、使臣への薄待、仏典の尊重の状況、農村における水車の活用、通貨、市場、交通、僧司などなど、15カ条に分類されたその日本報告が、後の『海東諸国紀』にも引き継がれたとする。

『海東諸国紀』には、日本人が多く定住する富山浦などの三浦や、日本本州・九州・対馬・壱岐・琉球の貴重な地図が収録されており、記事の収載情報の詳細さからも、多くの研究者の注目を集めている[青山定雄1939][秋岡武次郎1955][中村拓1957][田中健夫1982・1988]。地図は、江戸時代の松下見林著『異称日本伝』にもそっくり引用されたり、日本に多くの写本が作成され流布したりするなど、その影響力は大きい[田中健夫1995b][ロビンソン、ケネス2002]。訳注本[田中健夫1991]によって、難解な原文内容を容易に把握することも可能である。著者の申叔舟個人に関して、同じ時期に日本の外交文書起草を司った瑞溪周鳳と比較し、彼の‘交隣第一主義’を高く強化する[田中健夫1995b]や、その生涯をたどり、小中華主義者というよりは文化相対主義者であるとして高く評価する[河宇鳳1997]などが存在する。なお申叔舟の死(1475年)は、朝鮮王朝の日本観に大きな影を残したとされている。[村井章介1993a][田中健夫1995b]は、1479年朝鮮国王の

諮問へ回答を寄せた李仁畦による日本観察報告を事例に、日本知識人に対する差別的態度が明確に認められるとし、また【関周一1999】は15世紀も時代が下るに従い、朝鮮使節の帰朝報告のなかに日本社会のマイナス面を強調する傾向が出てきたとしている。

#### 4、文化交流

室町時代に、漢詩と外交の密接不可分な関係については、近年、村井章介が豊富な事例を発掘しており、日朝関係における詩文応酬のありさまが浮き彫りになりつつある【村井章介1993b・1995】。これによると外交官には高度な詩文の能力が求められ、朝鮮では通信使に随行する軍官の選任に際してさえ、詩章の才能が試されたともいう。朝鮮側記録には、通信使正使との宴会の席上、応酬された漢詩も収録されており、これからの研究が期待される分野でもある。

文物の交流という視点からみると、先述したように、朝鮮使節(通信使のみならず回礼使・報聘使なども含む)ごとの贈答品目については、【仲尾宏1986】によって明らかにされている。通信使に限っていえば、室町幕府への贈品には、絹布・綿布・麻布や人参、虎皮・彪皮などが選ばれていたことが明らかにされている【小野晃嗣1941】【田村洋幸1967】。一方、この時期、日本人が朝鮮へ求めた最大のものが、高麗版大蔵経である。しかし、通信使の礼物のリストに大蔵経が入っていた事例はまったくなく【仲尾宏1996】【三宅英利1986】、幕府や地域権力は、大蔵経を揃えるべく、競って朝鮮へ使節を派遣しなければならなかった(【菅野銀八 1924】参照)。

#### 四、朝鮮通信使の途絶理由

1443年来日の通信使以降、1459年・1479年の二回にわたって通信使が派遣されたが、海上事故や対馬での正使死亡のため任務を全うできず、結果的に1443年の来日をもって中世通信使使行の歴史は途絶する。【三宅英利1986】によると、その後、朝鮮王朝では1483年・1490年・1535年の三回にわたって派遣の発議がなされたが、いずれも海路危険などの理由で沙汰止みに終わったという。これより通信使は、1590年豊臣秀吉への派遣まで、150年間の途絶期に入る。

近年、朝鮮通信使の途絶理由について、通説とされる「海路危険」以外に、新しい提言がなされている。まず伊川健二は、1443年の通信使が最後の来日使節になった理由として、このときの幕府による公貿易不履行が朝鮮側にわだかまりを残し、いわば経済的問題が途絶理由であるとした【伊川健二2000a】。これによると、「高麗人」迎接用の要脚(必要経費)として幕府が諸大名(守護)から国役(一国全体に賦課する臨時課役)を徴収し、幕府はそれを「商売の料」(貿易資金)に用いていたが、その国役が未徴収になり、よって公貿易が成立しなかったとする。これに対して橋本雄は、考察の前提となる「国役」のとらえかたに問題があるとし、そもそも「諸大名国役出銭」とは貿易資金ではなく、実際には段銭(田地の反別に徴収する臨時税)や人夫役(接待費用や運送費)のことを指すとしている【橋本雄2000a】。通信使は1443年が最後ではなく、任務を全うしえなかったものの、その後も1459年・1479年の二回にわたって派遣されていたことから、1443年通信使をめぐる状況のみから立論する伊川説に疑問を呈している。

さらに最近の新たな傾向としては、長期にわたる通信使の途絶理由を、偽使の横行とからませて論じるものがみられる。たとえば、京都から西日本の政治的混乱期に多数の偽「王城大臣使」が朝鮮へ渡航するが、偽使活動が朝鮮側に露顕することのないよう、内乱を理由に朝鮮通信使の来日を断念させるような偽使自身や対馬宗氏の言動が目立つという〔橋本雄1997b〕。また米谷均は、偽「王城大臣使」のみならず、深処倭(対馬以外の倭人)名義の凶書(銅印)をかき集め、実質上の朝鮮渡航権を独占していた偽使勢力の横行は、通信使派遣の中断によって長期化したととらえる〔米谷均2002b〕。これによれば偽使勢力は、朝鮮や日本本土への夥しい情報操作を行うことによって、対馬-朝鮮ラインの閉鎖性を確立し、そのことが朝鮮王朝側に日本の正確な実態を把握しにくくさせて通信使来日の途絶を招来させたとしている(→「偽使」研究史を参照)。

## 五、今後の研究課題

以上、朝鮮通信使(中世編)研究の整理をふまえて、今後、期待される課題を列記しておく。

### 1、 朝鮮国使節の総合的研究

「はじめに」で提示したように、中世期朝鮮国が日本国王(室町将軍)へ派遣した使節は、「通信使」以外に「回答使」「通信官」「報聘使」「回礼官」などの名称のものが10回以上も確認されている。これらの使行と、「通信使」の決定的相違点は何か。使節構成員や派遣目的をそれぞれの使行ごとに明確にし、通信使成立に至る過程をさらに明確に探る必要がある。

### 2、 北東アジア史における「朝鮮外交秩序」の問題

「朝鮮外交秩序」とは、〔高橋公明1987a・1987b〕の造語であるが、室町期における朝鮮通信使の確立が、そうした外交体制のあり方とどのように連関するか。これまで、「朝鮮外交秩序」は1470年代の「朝鮮遣使ブーム」との絡みで論じられ、主として日本・琉球との関係に主眼を置いた枠組みのなかでなされてきた。しかし視点をより広げ、明朝・女真・日本など北東アジア史全域のなかでみていくと、そこに冊封関係や安全保障の視点からみた「通信使の成立」という課題が内包されている。朝鮮国内における通信使の役割・意義を考えるためにも、重要な問題と考えられる。

### 3、 通信使構成員の格付けと政治的立場

日本への通信使は、明への燕行使に較べて位階の低い者が任じられていた可能性が高いと想定されている。しかし使者の政治的位置に関しては、微視的に検討されたわけではない。通信使構成員を、回礼使・大内氏や対馬宗氏などへの使節(通信官・敬差官)・燕行使などと比較検討し、朝鮮政府内における使者の政治的立場も含めて、個別事例研究を積み重ねていく必要がある。また、琉球-朝鮮関係における国王使との比較研究も重要である。

#### 4、通信使をめぐる日本国内の問題

朝鮮通信使の来日に際し、日本における警固・交通路・接待経費などの役負担・財政的背景の問題については、史料的制約もあり、解明できていない大きな問題である。通信使とかかわる諸守護大名勢力はもとより、幕府による接待の仕組みについても、具体的なことはまだ不明である。近世期の通信使との比較を視野に入れつつ、あるいは当該期、日本を訪れた明使節や琉球使節などとの比較研究も重要である。



朝鮮通信使(中世編) 文献目録

No.	刊行年	著者	表題	出典
1	1906	上村閑堂(観光)	「室町時代五山禅僧の外交」	『禅宗』133~135
2	1914~15	栢原昌三	「日明勘合貿易に於ける細川大内二氏の抗争」1~5	『史学雑誌』25-9、10、11、26-2、3
3	1915	瀬野馬熊	「正統癸亥条約に就て」	『史学雑誌』26-9
4	1918a	上村閑堂(観光)	「我が中世の外交と禅僧」	『禅宗』275
5	1918b	上村閑堂(観光)	「足利時代本邦に費されたる高麗藏経に就きて」	『禅宗』285
6	1919	瀬野馬熊	「大内義弘と朝鮮との関係に就いて」	『史学雑誌』30-1
7	1924	菅野銀八	「高麗板大藏経に就て」	朝鮮史学会編『朝鮮史講座』特別講義編
8	1928	中村栄孝	「海東諸国紀の撰修と印刷」	『史学雑誌』39-8、9
9	1929	中村栄孝	「海東諸国紀とその地図に就いて」	『朝鮮』164
10	1930	今村鞆	「足利氏と朝鮮の大藏経」	『朝鮮』186
11	1930	中村直勝	「増上寺藏宋板一切経の由来」	『内藤博士頌寿記念史学論叢』弘文堂
12	1930	中村栄孝	「倭人上京道路に就いて」	『歴史地理』56-2
13	1931	秋山謙蔵	「朝鮮使節の觀たる室町初期の社会経済事情」	『歴史教育』6-7
14	1931	川口卯橘	「大藏経板求請と日鮮の交渉」	『青丘学叢』3
15	1932	伊波普猷	「海東諸国記附載の古琉球語の研究—語音翻訳釈義—」	『金沢博士還暦記念東洋語学乃研究』三省堂
16	1935	秋山謙蔵	『日支交渉史話』	内外書籍
17	1937	池内宏	「高麗朝の大藏経」	『満鮮史研究』中世第二冊
18	1937	東恩納寛淳	「申叔舟の海東諸国紀に現れたる琉球国図について」	『史学』16-3
19	1938	金台復	「麗末から李朝初期まで詩文集に現れた日鮮の交通関係」	『朝鮮』280
20	1938	竹内理三	「中世寺院と外国貿易」(上・下)	『歴史地理』72-1、2
21	1939	青山定雄	「李朝に於ける二三の朝鮮全図について」	『東方学報』東京 9
22	1939	秋山謙蔵	『日支交渉史研究』	岩波書店
23	1941	小野晃嗣	『日本産業発達史の研究』	至文堂 (1981年復刻版:法政大学出版局)
24	1948	黒田省三	「朝鮮貿易の本質に就て」	『日本歴史』10
25	1954	田中健夫	「中世日鮮交通における貿易権の推移」	『史学雑誌』63-3
26	1954	浜田敦	「海東諸国紀に記載された日本の地名等について」	『人文研究』5-4
27	1955	秋岡武次郎	「朝鮮、中国に伝わった行基式日本図」	『日本地図史』河出書房
28	1955	黒田省三	「中世朝鮮貿易に於ける輸出物資に就て」	児玉幸多編『日本社会史の研究』吉川弘文館

29	1956	江田俊雄	「日韓国交を媒介した高麗版大蔵経」	『親和』35
30	1957	中村拓	「戦国時代の日本図」	『横浜市立大学紀要』58
31	1959	田中健夫	『中世海外交渉史の研究』	東京大学出版会
32	1960	網野善彦	「地域史研究の一視点—東国と西国—」	佐々木潤之介・石井進編『新編日本史研究入門』東京大学出版会
33	1960	高橋保	「対外交渉史上の日本刀について」	『たたら研究』5
34	1960a	堀池春峰	「中世・日鮮交渉と高麗版蔵経—大和・円成寺栄弘と増上寺高麗版—」	『史林』43-6 [堀池 1982 収録]
35	1960b	堀池春峰	「室町時代における薬師・長谷両寺再興と高麗船」	『大和文化研究』5-9 [堀池 1982 収録]
36	1961	田中健夫	『倭寇と勘合貿易』(日本歴史新書)	至文堂
37	1961	内藤雋輔	『朝鮮史研究』	東洋史研究会
38	1963	長正統	「景轍玄蘇について—外交僧の出自と法系—」	『朝鮮学報』29
39	1963	田中健夫	「中世対外関係史研究の動向」	『史学雑誌』72-3 [田中 2003 収録]
40	1964	長正統	『朝鮮送使国次之書契覚』の史料性格	『朝鮮学報』33
41	1965	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』上	吉川弘文館
42	1966	弥永貞三	「『拾芥抄』及び『海東諸国記』にあらわれた諸国の田積史料に関する覚え書—中村教授『海東諸国記の撰修と印刷』の脚注として—」	『名古屋大学文学部研究論集』史学 14
43	1966	長正統	「中世日鮮関係における巨酋使の成立」	『朝鮮学報』41
44	1966	丸亀金作	「高麗の大蔵経と越後安国寺とについて」	『朝鮮学報』37・38
45	1967	田村洋幸	『中世日朝貿易の研究』	三和書房
46	1967	中村栄孝	『老松堂日本行録』(井上本)の景印によせて」	『朝鮮学報』45
47	1970	田中健夫	「東アジア通交関係の形成」	『岩波講座・世界歴史9(中世3)』、岩波書店
48	1972	田村洋幸	「日韓交通史の問題点—14～15世紀の日韓関係を中心として」	『韓』1-8
49	1973	泉澄一	「室町時代、対馬における仰之梵高和尚について—対朝鮮交易書契僧の始祖—」	『対馬風土記』10
50	1975	田中健夫	『中世対外関係史』	東京大学出版会
51	1975	田中健夫	『朝鮮通交大紀』と外交上の秘密	『日本歴史』320
52	1976	田中健夫	『朝鮮通交大紀』雑考	『朝鮮学報』79
53	1976	森崎蘭外	「朝鮮通信使の漢詩」	『季刊三千里』7
54	1978	服部四郎	「日本祖語について 7」	『月刊言語』1978年9月号
55	1979	長節子	「『おふせん』論考—対馬の孤草島釣魚に関する一考察—」	『朝鮮学報』36
56	1979	多和田真一郎	「十五・六世紀首里語の音韻—『語音翻訳』にみる—」(上・下)	『沖縄文化』51・52
57	1980	堀池春峰	「高麗版輸入の—様相と観世音寺」	『南都仏教史の研究』上(東大寺篇)、法蔵館
58	1981	田中健夫	「勘合符・勘合印・勘合貿易」	『日本歴史』392

59	1982a	高橋公明	「外交儀礼よりみた室町時代の日朝関係」	『史学雑誌』91-8
60	1982b	高橋公明	「外交文書、「書」「咨」について」	『年報中世史研究』7
61	1982c	高橋公明	「村井報告批判」	『歴史学研究』510
62	1982	田中健夫	『対外関係と文化交流』	思文閣出版
63	1982	堀池春峰	『南都仏教史の研究』下(諸寺篇)	法蔵館
64	1982	三宅英利	『朝鮮観の史的展開』	みき書房
65	1982	村井章介	「中世日本の国際意識について」	『歴史学研究別冊 民衆の生活・文化と変革主体』青木書店 [村井章介 1988a 収録]
66	1984	李進熙	『倭館・倭城を歩く—李朝のなかの日本—』	六興出版
67	1984	田中健夫	「『統善隣国宝記』について—所収史料の特質と撰述の経緯—」	『東洋大学文学部紀要』38・史学科編 10
68	1984	多和田真一郎	「沖縄語史的研究所説—『語音翻訳』再論—」	『現代方言学の課題』3(史的研究篇)、明治書院
69	1984	三宅英利	「室町時代の朝鮮通信使—通信使の初期形態—」	『北九州大学文学部紀要』B系列 16 [三宅 1986 収録]
70	1985	高橋公明	「室町幕府の外交姿勢」	『歴史学研究』546
71	1985	村井章介	「建武・室町政権と東アジア」	歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』中世2、東京大学出版会
72	1986	申基碩	「15世紀の韓日通交」	『アジア公論』15-2
73	1986	三宅英利	『近世日朝関係史の研究』	文献出版
74	1987	長節子	『中世日朝関係と対馬』	吉川弘文館
75	1987	蔭木英雄	『蔭涼軒日録—室町禅林とその周辺—』	そしえて
76	1987a	高橋公明	「朝鮮遣使ブームと世祖の王権」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館
77	1987b	高橋公明	「朝鮮外交秩序と東アジア海域の交流」	『歴史学研究』573
78	1987	田中健夫	「足利将軍と日本国王号」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館 [田中健夫 1996 収録]
79	1987	田中博美	「武家外交の成立と五山禅僧の役割」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館
80	1987a	村井章介	「春屋妙葩と外交—室町幕府初期の外交における禅僧の役割—」	『木宮泰彦生誕一〇〇年記念論文集』学校法人常葉学園 [村井 1988a 収録]
81	1987b	村井章介	「朝鮮に大蔵経を求請した偽使について」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館 [村井 1988a 収録]
82	1987c	村井章介(校注)	『老松堂日本行録—朝鮮使節の見た中世日本—』(宋希璟著)(岩波文庫)(第1刷)	岩波書店
83	1987d	村井章介	「中世における東アジア諸地域との交通」	朝尾直弘ほか編『日本の社会史1 列島内外の交通と国家』岩波書店 [村井章介 1995 収録]
84	1988	田中健夫	「『海東諸国紀』の日本・琉球図—その東アジア史的意義と南波本の紹介—」	『海事史研究』45 [田中健夫 1997 収録]
85	1988a	村井章介	『アジアのなかの中世日本』	校倉書房

86	1988b	村井章介	「中世人の朝鮮観をめぐる論争」	『歴史学研究』576 [村井章介 1988a 収録]
87	1989	田中健夫	「漢字文化圏のなかの武家政権—外交文書作成者の系譜—」	『思想』796 [田中健夫 1996 収録]
88	1989	仲尾宏	「室町時代の朝鮮使節と京都」	『前近代の日本と朝鮮—朝鮮通信使の軌跡—』、明石書店
89	1990	大塚秀明	『『海東諸国紀』の「語音翻訳」について』	『筑波大学』言語文化論集』32
90	1990	長節子	「孤草島釣魚禁約」	網野善彦ほか編『海と列島文化3 玄界灘の島々』小学館
91	1990	佐伯弘次	「室町時代の遣明船警固について」	九州大学国史学研究室編『古代中世史論集』、吉川弘文館
92	1990	関周一	「書評:村井章介著『アジアのなかの中世日本』」	『歴史学研究』603
93	1990	高橋公明	「済州島出身の官僚高得宗について」	『名古屋大学文学部研究論集』史学 36
94	1990	山室恭子	「書評:村井章介著『アジアのなかの中世日本』」	『史学雑誌』98-8
95	1991	関周一	「15世紀における朝鮮人漂流人送還体制の形成」	『歴史学研究』617 [関周一 2002a 収録]
96	1991	田中健夫(校注)	『海東諸国紀—朝鮮人の見た中世の日本と琉球—』(申叔舟著)(岩波文庫)	岩波書店
97	1992	高橋公明	「外交称号、日本国源某」	『名古屋大学文学部研究論集』史学 38
98	1992	村井章介	「中世日朝貿易における経典の輸入」	『日韓の交流と比較—歴史と現在—』東京大学文学部 [村井 1997 収録]
99	1993	河宇鳳	「朝鮮初期対日使行員の日本認識」	環日本海松江国際交流会編『高麗仏教文化と山陰』(環日本海(東海)シリーズ 92 報告書)、同交流会
100	1993a	村井章介	『中世倭人伝』(岩波新書)	岩波書店
101	1993b	村井章介	「漢詩と外交」	荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史 6 文化と技術』東京大学出版会
102	1994	國原美佐子	「唐船奉行の成立—足利義教による飯尾貞連の登用—」	『(東京女子大学紀要)論集』44-2
103	1994	佐々木銀弥	『日本中世の流通と対外関係』	吉川弘文館
104	1994a	関周一	「倭人送還交渉と三浦の形成」	『社会文化史学』33 [関周一 2002 収録]
105	1994b	関周一	「中世「対外関係史」研究の動向と課題」	『史境』28
106	1994	仲尾宏	『『蔭涼軒日録』にみる「高麗」記事と「日本国王使」の性格』	『(京都芸術短期大学紀要)瓜生』16
107	1994	関德基	『前近代東アジアのなかの韓日関係』	早稲田大学出版部
108	1995	関周一	「アジアの変動と国家・地域権力」	佐藤和彦ほか編『日本中世史研究事典』、東京堂出版
109	1995a	田中健夫(編)	『訳注日本史料:善隣国宝記・新訂統善隣国宝記』	集英社
110	1995	田代和生・米谷均	「宗家旧蔵「函書」と木印」	『朝鮮学報』156
111	1995b	田中健夫	「十五世紀日朝知識人の相互認識」	田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館 [田中健夫 1996 収録]
112	1995	村井章介	『東アジア往還—漢詩と外交—』	朝日新聞社
113	1996	応地利明	『絵地図の世界像』(岩波新書)	岩波書店
114	1996	田中健夫	『前近代の国際交流と外交文書』	吉川弘文館

115	1996	田中健夫	「外交史としての朝鮮通信使」	申基秀・仲尾宏編『善隣と友好の記録 体系朝鮮通信使2 丙子・寛永度 癸未・寛永度』明石書店〔田中 2003 収録〕
116	1996	仲尾宏	「15 世紀初頭の日朝通交と文物贈答―一世宗期の交流を通じて―」	『立命館言語文化研究』7-4
117	1996	橋本雄	「中世日朝関係史の再検討―枠組み・時期区分・相互認識―」	『朝鮮史研究会会報』125
118	1997	大隅和雄・村井章介 (編)	『中世後期における東アジアの国際関係』	山川出版社
119	1997	佐伯弘次	「外国人が見た中世の博多」	村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』山川出版社
120	1997a	関周一	「室町幕府の朝鮮外交―足利義持・義教期の日本国王使を中心として―」	阿部猛編『日本社会における王権と封建』、東京堂出版
121	1997b	関周一	「東アジア海域の交流と対馬・博多」	『歴史学研究』703〔関 2002 収録〕
122	1997	高橋公明	「外国人の見た中世日本」	村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』山川出版社
123	1997	田中健夫	『東アジア通交圏と国際認識』	吉川弘文館
124	1997	河宇鳳	「申叔舟と『海東諸国紀』―朝鮮王朝前期のある「国際人」の営為―」	〔大隅和雄・村井章介 1997 収録〕
125	1997a	橋本雄	「『遣朝鮮国書』と幕府・五山―外交文書の作成と発給―」	『日本歴史』589
126	1997b	橋本雄	「中世日朝関係における王城大臣使の偽使問題」	『史学雑誌』106-2
127	1997c	橋本雄	「書評と紹介:田中健夫著『前近代の国際交流と外交文書』『東アジア通交圏と国際認識』」	『古文書研究』46
128	1997	村井章介	『国境を超えて―東アジア海域世界の中世―』	校倉書房
129	1997	米谷均	「16 世紀日朝関係における偽使派遣の構造と実態」	『歴史学研究』697
130	1998a	関周一	「対馬・三浦の倭人と朝鮮」	『朝鮮史研究会論文集』36
131	1998b	関周一	「朝鮮王朝からの銅銭輸入」	『出土銭貨』9
132	1998a	橋本雄	「室町・戦国期の將軍権力と外交権―政治過程と対外関係―」	『歴史学研究』708
133	1998b	橋本雄	「室町幕府外交の成立と中世王権」	『歴史評論』583
134	1998c	橋本雄	「遣明船と遣朝鮮船の経営構造」	『遙かなる中世』17
135	1998	米谷均	「史料紹介:東大史料編纂所架蔵『日本関係朝鮮史料』」	『古文書研究』48
136	1999a	伊藤幸司	「中世後期の臨濟宗幻住派と対外交流」	『史学雑誌』108-4〔伊藤 2002 収録〕
137	1999b	伊藤幸司	「一五・六世紀の日明・日朝交渉と夢窓派華蔵門派―日本国王使の外交僧をめぐって―」	『朝鮮学報』171〔伊藤 2002 収録〕
138	1999	佐伯弘次	「室町期の博多商人宗金と東アジア」	『史淵』136
139	1999	関周一	「朝鮮王朝官人の日本観察」	『歴史評論』592
140	1999	橋本雄	「史料紹介:丹波国氷上郡佐治荘高源寺所蔵文書」	『東京大学日本史学研究室紀要』3
141	2000a	伊川健二	「中世後期における外国使節と遣外国使節」	『日本歴史』626
142	2000b	伊川健二	「諸国王使をめぐる通交制限」	『遙かなる中世』18

143	2000	金光哲	「高麗大藏経と室町幕府」	『東アジア研究』28
144	2000a	橋本雄	「史料紹介：丹波国氷上郡佐治荘高源寺所蔵文書(続)」	『東京大学日本史学研究室紀要』4
145	2000b	橋本雄	「室町幕府外交は王権論といかに関わるのか？」	『人民の歴史学』145
146	2000	村井章介(校注)	『老松堂日本行録—朝鮮使節の見た中世日本—』(宋希璟著)(岩波文庫)(第3刷)	岩波書店
147	2000	米谷均	「解説・「玄方進献卷子」について」	田代和生・李薫監修『マイクロフィルム版 対馬宗家文書 第I期朝鮮通信使記録』別冊下
148	2001	國原美佐子	「十五世紀の日朝間で授受した禽獣」	『史論』54
149	2001	森勝彦	「中世九州の交易港と唐人町」	『国際文化学部論集』2-1
150	2002	荒木和憲	「対馬島主宗貞茂の政治的動向と朝鮮通交」	『日本歴史』653
151	2002a	伊藤幸司	『中世日本の外交と禅宗』	吉川弘文館
152	2002b	伊藤幸司	「現存史料からみた日朝外交文書・書契」	『九州史学』132
153	2002c	伊藤幸司	「中世後期における対馬宗氏の外交僧」	『年報朝鮮学』8
154	2002d	伊藤幸司	「中世後期外交使節の旅と寺」	中尾堯編『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館
155	2002a	長節子	『中世 国境海域の倭と朝鮮』	吉川弘文館
156	2002b	長節子	「朝鮮前期朝日関係の虚像と実像—世祖王代瑞祥祝賀使を中心として—」	『年報朝鮮学』8
157	2002	須田牧子	「室町期における大内氏の対朝関係と先祖観の形成」	『歴史学研究』761
158	2002a	関周一	『中世日朝海域史の研究』	吉川弘文館
159	2002b	関周一	「日本列島・朝鮮半島の異民族—被虜朝鮮人・中国人と倭人—」	黒田弘子・長野ひろ子編『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』吉川弘文館
160	2002c	関周一	「唐物の流通と消費」	『国立歴史民俗博物館研究報告』92
161	2002a	橋本雄	「永正度の遣明船と大友氏—警固・抽分・勘合から—」	『九州史学』130
162	2002b	橋本雄	「遣明船の派遣契機」	『日本史研究』479
163	2002a	米谷均	「文書様式論から見た一六世紀の日朝往復書契」	『九州史学』132
164	2002b	米谷均	「豊臣政権期における海賊の引き渡しと日朝関係」	『日本歴史』650
165	2002	ロビンソン・ケネス	『海東諸国紀』写本の一考察」	『九州史学』132
166	2003	荒木和憲	「対馬島主宗貞盛の政治的動向と朝鮮通交」	『朝鮮学報』189
167	2003	関周一	「明帝国と日本」	榎原雅治編『一揆の時代』(日本の時代史 11) 吉川弘文館
168	2003	田中健夫	『対外関係史研究のあゆみ』	吉川弘文館
169	2003	橋本雄	「中世日本対外関係史の論点」	『歴史評論』642
170	2003	柳父優子	「満済と「蔭涼職」」	『(法政大学大学院)紀要』50号
171	2003	山内謙	『中世 瀬戸内海の旅人たち』(歴史文化ライブラリー)	吉川弘文館
172	2004	木村拓	「15世紀朝鮮王朝の対日本外交における図書使用の意味—冊封関係との接点の探求—」	『朝鮮学報』191

173	2004	須田牧子	「中世後期における赤間関の機能と大内氏」	『ヒストリア』189
174	2004	竹田和夫	「室町期対外交渉における五山僧の役割について—応永～応仁年間を中心に—」	『(新潟大学大学院現代社会文化研究科)資料学研究』(新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「大域的文化的システムの再構成に関する資料学的研究」)1
175	2004	橋本雄	「書評: 田中健夫『対外関係史研究のあゆみ』」	『日本歴史』675

# 朝鮮通信使(近世編)

吉田光男／田代和生・六反田豊・伊藤幸司・橋本雄・米谷均

## 一、はじめに——日朝関係の特徴と対象とされる通信使

- 1、豊臣政権期～徳川初期の通信使(1590年～1624年)
- 2、1636年以降の通信使

## 二、豊臣政権期～徳川初期の通信使(1590年～1624年)

### 三、1636年以降の通信使

- 1、聘礼問題
  - ① 寛永期の聘礼問題
  - ② 正徳期の聘礼問題
  - ③ 文化期の易地聘礼問題

### 2、通信使の接待と負担

### 3、文化交流

### 4、民衆文化への影響

## 四、今後の研究課題

(豊臣政権期～徳川初期)

- 1、豊臣政権および徳川初期政権の外交史研究
- 2、個々の通信使の実態分析
- 3、宣祖・光海君・仁祖期における朝鮮王朝の外交政策  
(1636年以降)
- 4、燕行使と通信使の比較検討
- 5、訳官使節に対する研究
- 6、琉球使節・オランダ使節など、江戸に赴いた他の外国人使節との比較検討
- 7、通信使派遣をめぐる朝鮮側の財政的負担の研究

## 一、はじめに——日朝関係の特徴と対象とされる通信使

### 1、豊臣政権期～徳川初期の通信使(1590年～1624年)

文禄・慶長の役(1592～98年)以来中断していた朝鮮からの通信使は、1590年、すなわち戦役突入の2年前、豊臣秀吉に対して派遣され、1443年くらい約150年ぶりの来日を実現する。しかし



このころの東アジア海域は、「偽使」の横行時代にあたり、これが解消する1635年の「柳川一件」（国書改ざんが露頭し、宗氏の家老柳川氏が処罰された事件）までは、日朝両国の統一政権の意向が反映されにくい状況下にある。「偽使」勢力の介在の結果、通信使がもたらす双方の国書が偽造あるいは改ざんされるといった‘異常事態’が続いており、この時期の通信使は前後の時代と区別して考察する必要がある（→「偽使」研究史を参照）。

こうしたいわば「偽使の時代」の通信使は、豊臣秀吉へ派遣された1590（天正18）年と1596（慶長元）年の二回、江戸時代の初期、徳川秀忠および家光へ派遣された1607（慶長12）年、1617（元和3）年、1624（寛永元）年の三回、合計して五回におよぶ。このうち1596年の通信使は、堺に待機中に講和交渉が破綻し、豊臣秀吉との会見は行われていない。また、徳川将軍へ派遣された三回の通信使は、前年に朝鮮へ派遣された日本国王使（偽使）の国書への回答、あるいは先の戦役の被虜人を帰還させることを目的とするため、朝鮮側の正式名称は「回答使兼刷還使」である。

## 2、1636年以降の通信使

1635年、対馬宗氏の国書改ざんが問われた「柳川一件」が解決し、翌1636年より「偽使勢力」の介在なしの通信使来日が1811年まで続く。年次別に示すと、1636年次使節（寛永13年通信使）、1643年次使節（寛永20年通信使）、1655年次使節（明暦通信使）、1682年次使節（天和通信使）、1711年次使節（正徳通信使）、1719年次使節（享保通信使）、1748年次使節（延享通信使）、1764年次使節（宝暦通信使）、1811年次使節（文化通信使）の、合計九使節になる。このほか実現に至らなかったが、幕末の通信使来聘計画もある。

この時期の日朝関係の特徴をあげるとすれば、両国ともに自己を中心に置く「小中華意識」の台頭と強化が顕在化し、時代が下るにつれてこの「意識」が衝突していく点にある。すなわち〔池内敏1991b〕〔三宅英利1993b〕〔孫承喆1993〕の指摘によれば、日本においてはいわゆる「鎖国」政策の進展とともに台頭する「日本型華夷意識」であり、朝鮮においては清の朝鮮侵略（1636年）と明の滅亡（1644年）を背景に誕生した「朝鮮型中華意識」であるという。こうした「小中華意識」をめぐる競合は、日朝関係が過渡期の段階において、双方の妥協と現実主義によって表面化することが抑えられていたが、両国の関係が安定に向かうと、礼分と規範を重視する「礼分主義」が優先され、「小中華意識」のせめぎ合いが露わになっていく時代であったともいえる。

## 二、豊臣政権期～徳川初期の通信使（1590年～1624年）

この時期の通信使に関する研究は、文禄・慶長の役やその戦後処理についての一部として扱われたものが多い。その中であって、戦争以外の両国の通交について触れた最も古い論文には、〔内藤耻叟1896〕〔中村徳五郎1897〕〔千住武次郎1898〕がある。また、通信使自体を考察対象としたものに、〔辻善之助1904〕〔藤田明1904〕があるが、いずれも実証性という面では不十分なもの

であった。

精密な史料分析から導き出された研究は、文禄・慶長の役を扱った専門書〔池内宏1914〕に始まる。この研究は、戦争に至るまでの両国の交渉について、対馬宗氏の計略や1590年の朝鮮通信使の来日などを史料に基づき明らかにしている。昭和期に入り、日本の大陸侵略に同調する研究が多く輩出するなか、中村栄孝は江戸時代の日朝関係を見通す概説を発表する〔中村栄孝1934〕。中村の研究は、通信使を取り巻く近世日朝交流のありかたを、優れた実証的手法によって明らかにした。その一貫した研究姿勢は、従来の断片的かつ時局便乗的な諸説を克服し、後世の研究の出発点ともなっている。

近世初期の通信使をはじめとする日朝交流史研究は、1960年代になって飛躍的な進展をとげる。まず中村栄孝と並んで多くの研究を発表してきた田中健夫は、「偽使の時代」に深くかかわる対馬島主宗義智の動きを、島井宗室ら博多商人の商業勢力とともに具体的にとらえる〔田中健夫1962・1967〕。これによって豊臣政権時代から徳川初期にかけて、通信使の招聘に豪商らの経済的支援が無縁でなかったことが明らかにされる。ついで〔田中健夫1962〕は、1617(元和3)年に来日した通信使(回答使兼刷還使)の正使呉允謙以下の状況を、イギリス平戸商館長の日記から紹介する。さらに〔田中健夫1965〕は、広く日本・朝鮮・中国三国の連鎖関係の中から近世初期の日朝交渉を捉える必要性を主張する。とくに「柳川一件」の重要性を指摘し、「鎖国」と日朝関係の関連を究明する。これにより、江戸幕府のいわゆる「鎖国体制」は、中国を中心に形成された東アジア国際的秩序の日本的表現であったという新しい定義を提唱する。

一方、以前から実証的な研究を続けてきた中村栄孝は、通信使と巨大都市大坂の関わりについて詳細に検討する〔中村栄孝1964〕。中村もまた、広く東アジア国際交流の中で日朝関係を考察し、外交使節団として来日する通信使の役割を重視する。中村は、これを国際環境の中で捉え直すことによって、「柳川一件」を契機に定着する徳川将軍の国際的称号「大君」の意義に注目し、そこから「大君外交体制」なる概念を初めて提唱していく〔中村栄孝1967b・1969a・1969b〕。また〔中村栄孝1981〕は、幕府への初めての通信使派遣から2年目の1609(慶長14)年に締結された己酉約条の再考察を行う。ここでは、対馬側の『朝鮮通交大紀』と朝鮮側の『増正交隣志』『通交館志』の約条文面の違いに注目し、『東萊府接倭事目抄』の記事から、約条成立に至るまでの詳細な背景を明らかにする。

ロナルド・トビは、徳川外交政策の基調が幕府権力の正当性の確立にあったと主張し、日本人研究者の見逃しがちな近世初期の外交理論を鮮明に描き出す〔トビ、ロナルド1977〕。トビは、とくに「鎖国政策」が進展する寛永期(1620～30年代)の幕府外交に注目し、「柳川一件」をはさむ1624(寛永元)年と1636(寛永13)年の通信使の相違点を指摘し、とくに後者の通信使による日光山来訪を、幕府の権威を誇示する一種のデモンストレーションであると意義づける。この論旨は、1984年刊行(英語版)の日本語翻訳本〔トビ、ロナルド1990〕によってより詳細に検討され、近世初期に形成された国際秩序像を明示したのみならず、それに対応する外交儀礼の確立過程を初めて具体的に明らかにしている。

荒野泰典の研究は、前記の中村栄孝や田中健夫およびトビの研究を継承し、さらに発展させたものである。すなわち[荒野泰典1981・1988]は、近世日朝関係を論ずる中で、その前提である足利政権と豊臣政権、および徳川政権下の日朝関係を概観し、さらに「柳川一件」を契機に「大君外交体制」が確立したとする。荒野は、「鎖国体制」下の海外への窓口を、長崎・対馬・薩摩・松前の「四つの口」と定義し、とりわけ対馬藩の対朝鮮業務を「朝鮮押えの役」という軍役にみため、徳川幕府の外交・内政上の結節点としての朝鮮通信使の役割を位置づける。藤井譲治は、短文ながら、幕府初期の通信使について政治史の立場から概説し、今後の課題について簡単に触れている[藤井譲治1981]。

通信使研究で見逃せないのが、三宅英利の一連の成果である。このうち1617(元和3)年の通信使について、従来の「大坂平定・国内統一の賀」とする日本側の解釈と異なり、朝鮮王朝の真意は「国情探索・被虜刷還・対馬島牽制」にあったことを指摘する[三宅英利1973]。[三宅英利1974a・1974b]は、1624(寛永元)年と1636(寛永13)年の寛永年間に来日した2回の通信使に関する個別研究である。また[三宅英利1977]は、朝鮮王朝側の史料『海行録』に注目し、1607(慶長12)年の徳川政権初回の回答兼刷還使の日本派遣が、幾多の曲折と廟堂の論争を経た結果であり、真意は日本国情の探索にあり、決して安易に日本に屈したものではないことを論じている。研究の集大成である[三宅英利1986a]には、豊臣政権期から徳川初期にかけての通信使について、派遣時期別に時代背景、通信使の日本使行や日本観察の実態、通信使派遣の意義を詳細に検討している。

通信使や日朝外交だけを専門に扱ったものではないが、長正統は豊臣政権期より徳川政権初期まで、特に日朝国交再開と通信使派遣に貢献した外交僧の景轍玄蘇<sup>けいてつげんそ</sup>の実像を初めて明らかにしている[長正統1963]。また内藤雋輔は、侵略戦争によって生まれた被虜人の追跡を丹念に行い、刷還をめぐる通信使の交渉とその実績を例証する。とくに1607(慶長12)年の通信使副使慶七松の『海槎録』をはじめ、日本側記録も駆使して通信使の日本到着やその後の実態に触れている[内藤雋輔1976](→「文禄・慶長の役」研究史を参照)。阿部吉雄は、通信使を通じた文化交流、とくに儒学の分野について精力的な成果をあげる。このうち[阿部吉雄1965]は、林羅山が徳川政権初回の1607(慶長12)年から第6回の1655(明暦元)年の使節に至るまで接触したことに注目し、その筆談唱和や將軍返翰の起草について論じている。文化交流の面からの通信使研究は、李元植によって網羅的に行われており、阿部に続いて林羅山と通信使の接触について考察している[李元植1997]。

田代和生は、1629(寛永6)年、江戸時代唯一の朝鮮国都への上京使について、副使役の杉村采女の日記を校訂し[田代和生1980a]、さらにこれを詳細に分析することで、通信使に対応する日本国王使の様相を描写している[田代和生1980b・1981b]。[田代和生1981a]は、「柳川一件」まで存在した宗家家臣団への使船所務権(土地の代わりにあてがった朝鮮貿易権)の実態を明らかにし、対馬島内のそうした「重層的構造」が近世初期の通信使派遣および日朝通交に重大な影響を及ぼしていたことを指摘する。また[田代和生1983]は、対馬の外交僧規伯玄方の生涯

を追いながら、通信使派遣をめぐって行われた国書改ざんと、「柳川一件」の顛末を初めて明らかにする。

近年、朝鮮通信使研究を最も精力的に行っているのが、仲尾宏である。仲尾は、特に京都における通信使の動向に注目し、1607(慶長12)年および1617(元和3)年の伏見城における修好交渉、あるいは1590(天正18)年～1624(寛永元)年までに来日した通信使の京都での宿泊所である大徳寺のこと、さらに「洛中洛外図」に描かれる通信使や耳塚のことなどにも触れている〔仲尾宏1982・1990・2000a〕。さらに〔仲尾宏1997〕は、江戸時代12回にわたる通信使を網羅的に概観し、そこから近世初期の通信使の位置づけが明らかにされている。

また〔仲尾宏1999c〕は、近世初期の日朝国交回復期に重要な役割を演じた朝鮮の松雲大師(僧惟政)の活動について明らかにする。この研究に引き続き、近年、松雲大師を日朝国交回復に尽力した偉大な人物ととらえ、その活動を歴史的に位置付けようとする一連の研究がみられる。ここでは、文禄・慶長役時代の松雲大師の外交僧としての活動や思想などを論じたもの〔高柄翊2002〕〔北島万次2002〕〔曹国慶2002〕〔金栄作2002〕〔鄭柄朝2002〕、あるいは義僧兵将や国交回復期に講和使僧として来日した側面などを取りあげる〔李元植2002〕〔河宇鳳2002〕〔貫井正之2001〕など、松雲大師の多面的な分析が行われている。

### 三、1636年以降の通信使

#### 1、 聘礼問題

前近代の外交関係において、外交文書と外交儀礼に関わる問題は、国家の体面に直結する最重要課題である。両国が交換する国書の書式や、朝鮮通信使に対する接待儀礼に変更が施されると、双方の礼的世界観の不一致が露呈し、外交上の紛争に発展することがある。これを「聘礼問題」という。通信使来日時に、両国に様々な波紋を起こした聘礼問題は、①寛永期(1636年)、②正徳期(1711年)、③文化期(1811年)の三例をあげることがでる。

#### ①寛永期の聘礼問題

「柳川一件」の翌年である1636年の朝鮮通信使来日から、様々な制度改革が行われた。第一に徳川将軍の呼称を「日本国王」から「日本国大君」へ改変する。第二に日本側国書に記される年紀表記を、干支から日本年号に改める。第三に、朝鮮王朝側が名称を「回答使兼刷還使」から「通信使」に改称したことである。

こうした一連の改革について、とくに徳川幕府による「大君外交体制」の確立ととらえ注目したのが、中村栄孝である。中村は、これが中国を頂点とする東アジア国際秩序から離脱をはかった結果であるととらえ〔中村栄孝1967b〕、さらにこれを承けたロナルド・トビは、日本を中心とする「日本型華夷秩序」を自己主張したものと解釈する〔トビ、ロナルド1990〕。また〔荒野泰典1988〕によれば、この日本型華夷秩序は、自らを頂点として周辺諸国を属国視する点においては、中国の伝統的

な華夷秩序と似通っているが、自らが「華」である根拠を幕府の「武威」と天皇の存在に求めている点が大きく異なっているという。荒野は、幕府が朝鮮に対して「日本国王」号の使用停止を要請した理由は、明中心の国際秩序を前提とした日朝関係からの脱却を、朝鮮側にも認知させようとしたためであるとする。また一方で、徳川将軍自身が国書で「大君」号を自称しなかったのは、室町幕府以来の朝鮮蔑視観を継承した結果でもあるという。

しかし上記の見解に対しては、韓国側研究者から鋭い批判がなされている。関德基は、他称文言としての「国王」号の使用を日本側が避けた理由は、それが冊封称号に由来する文言であったためではなく、「国王」という語が直接的に天皇を指す用語として当時認識されていたため、次善の語として「大君」号を採用するに至ったのだと指摘する〔関德基1994〕。また孫承詰によれば、「大君」号を日本側が自称文言として用いなかった理由は、もともと「大君」なる語が将軍に対する敬称文言であり、これを自称文言として用いると朝鮮側に無礼となるため、あえて用いなかったに過ぎないとする〔孫承詰1993〕。ともあれ、日本側が「大君」号を設定し日本年号を用いた動機は、中華秩序からの脱却意図や朝鮮蔑視観に基づく要因よりも、将軍と天皇との位相関係に関わる問題という、極めて国内的な事情に左右されたものであるという可能性も否定できない。

紙屋敦之は、当時の日本社会において、「国王」という語は天皇と将軍を総称する用語であったため、将軍の称号として「大君」号が新たに考案されたと指摘している〔紙屋敦之1997〕。なお「大君」号の考案者については、中村栄孝は幕府の儒者林羅山であると推定するが、仲尾宏の検証によって対馬の以<sup>いていあん</sup>酌庵輪番僧（外交文書の起草などを行うため京都五山から交替で派遣される僧侶）の玉<sup>ぎよくほうこうりん</sup>峰光璘であることが明らかにされている〔仲尾宏1997〕。

寛永期の聘礼改革は日本側の主導によって進められ、朝鮮側も最終的にはこれを受け入れていく。その理由として〔三宅英利1986a〕は、当時の朝鮮朝廷が、後金の圧迫という北方問題の対処に忙殺されていたため、南辺の安定を絶対的に確立する必要があり、かつ柳川一件により政治的な苦境に陥っていた対馬宗氏を援護する意図が働いたためであるとする。また〔鈴木信昭1995〕は、当時の朝鮮（仁祖政権）にとって、しよせん対日関係は二義的なものに過ぎず、明・清との関係如何によって左右される傾向が強かったとする。

「大君外交」の特徴のひとつに、外国使節の来日を「入貢」と見なし、日本国内における将軍權威の高揚に利用していたとする説がある。例えば朝鮮通信使の来日を、日本側ではしばしば「朝鮮人来貢」「朝鮮人来朝」と呼ぶ。この点に注目した〔トビ、ロナルド1990〕は、寛永期の聘礼改革による通信使の日光山招待について、幕府が外交使節を利用して権力の正当性を国内に喧伝した格好の事例ととらえる。周知のように、日光山は徳川家康を祀る東照宮の所在地であるが、通信使の日光山来訪は、寛永13年（1636）の日光山「遊覧」を初め、寛永20年（1643年）の東照宮参拝、明暦元年（1655年）の東照宮と大猷院（家光霊廟）参拝など、3度に涉って実施されている。この通信使の日光山招待に関しては、大瀧晴子の一連の研究が最も詳しい。〔大瀧晴子1979b・1979c・1980〕によると、第1回目の来訪はいわば観光行為に過ぎなかったにもかかわらず、4年後に作成された絵巻物『東照宮縁起』では、通信使がさも東照宮に参拝したかのごとく描写されたこ

とを明らかにした。また第2回目と第3回目の来訪に伴ってなされた朝鮮国王親筆の額や銅鐘の進呈が、国内における幕府権威の高揚に大きく利用されたと詳細に検証している。

## ②正徳期の聘礼問題

1711年の通信使来日時に、新井白石の主導によってなされた聘礼改革は、従来の儀礼と饗応を全面的に変更し、結果的に日朝間に深刻な対立を招く。なかでも日朝双方の国書における徳川将軍の称号を、他称・自称ともども「日本国王」に改めたことは、将軍と天皇の位相関係をめぐる名分論に抵触し、国内で多くの議論を巻き起こすことになる。この正徳期の聘礼問題を論じた先行研究も、多くはこの「国王」号問題に集中している。栗田元次によると、白石の政治方針は文治主義と礼分主義に基づいたもので、幕府の権威高揚を図って「国王」号を提唱したが、同時に彼の皇室への尊崇は揺るぎがたく、朝廷の存在を無視したものではないと弁護する〔栗田元次1920〕。三浦周行は、白石の「国王」号論は、‘霸王(天下を治める者)である将軍を国王と称するのは当然である’とする霸王論から出発しているとし、天皇と将軍との関係を考慮すれば、不適切な称号であると批判する〔三浦周行1924〕。徳島一郎は、白石の「国王」号論に対する当時の賛同者と反対者の意見を検討した後、白石の持論は霸王思想と事大思想にとらわれていると論評し、将軍の王号使用は国民感情から見ても許されない、と強く批判する〔徳島一郎1929〕。宮崎道生は、正徳聘礼改革の眼目は和平・簡素・対等の三要素からなり、「国王」号を提唱した意図も、徳川将軍と朝鮮国王の対等性を明示する対外的観点に依拠したもので、国内的に将軍を「国王」の地位に引き上げることを狙ったものではないとする〔宮崎道生1958〕。以上の諸研究は、太平洋戦争前の国体観念論の制約のなかで「国王」号の是非を論ずるといった色彩が強く、結局は‘白石は尊皇家であったか否か’の論議に帰結してしまう傾向が強い。

しかし伊東多三郎は、そうした国体論の束縛から脱して「国王」号論を論じた点で注目に値する。伊東は、当時の将軍権力が実質的に霸者的性格から君主的性格へ推移していたことを指摘し、白石の「国王」号論は、実態に即した名義と制度を創出して将軍の君主的権威を内外に確立しようとしたものに他ならないとする〔伊東多三郎1953〕。この伊東の見解を再検討した鈴木えりもは、将軍の外交称号が自称・他称とも「国王」号に統一された点にこそ注目すべきだと指摘し、これによって日本の政治的権力者が天皇から将軍へ名実ともども移行したことを明示した点を評価する〔鈴木えりも1993〕。関德基もまた、伊東の視点を高く評価する。〔関德基1994〕によると、白石の「国王」号論が対外的要請よりも内政的動機に依拠したものであったとする。さらに、通信使の将軍謁見儀礼や道中供応(路宴)儀礼など、他の聘礼改革の内容検討を通じて、白石の改革が東アジア諸王朝の伝統的な聘礼規範に立脚したものであり、将軍の「帝王化」を具現化するためのものであったとも結論する。

白石による聘礼改革の構想は、東アジア世界に通用する礼的体系の構築を目指し、緻密に理論武装したにもかかわらず、朝鮮側への通告方法が拙速かつ一方的なものであったため、朝鮮側の対日不信感を増幅させる結果となる。たとえば双方が国書の文字の書き替えを要求した「国

諱」問題にみられるように、白石による聘礼改革は、日朝両国の間に‘正しい礼分のありかた’をめぐる果てしない応酬を引き起こす結果を生んだ〔関德基1994〕。しかし同時に幕府内部の執権者たちが、通信使へ強い関心と呼び起こすきっかけを作った点も見逃せない。田代和生は、正徳通信使の行列の光景を描いた絵巻物が、老中土屋政直の命令によって大量に作られたことを明らかにしている〔田代和生1990〕。通信使の行列絵巻は日本各地に多数現存するが、幕府の命による大規模な作成計画によるものは、正徳期が唯一である。通信使へ強い関心を示し、老中の差配により記録性を重視した行列絵巻が誕生したのも、正徳の聘礼改革が産んだ一つの副産物であるといえよう。

正徳の聘礼改革は、次回の享保通信使(1719年)において廃棄され、方式は天和通信使(1682年)の旧例に戻された。しかしこの時においても、京都大仏殿の招宴問題という新たな聘礼問題が発生している。通信使による方広寺大仏殿遊覧は、元和通信使(1617年)から確認することができ、明暦通信使(1655年)以降、宴席を設けることが定例化している。しかし享保通信使は、大仏殿が豊臣秀吉によって創建されたことを理由に招宴を拒絶し、迎接役の京都所司代や対馬藩との間で紛議を引き起こす。この大仏殿招宴問題については、〔仲尾宏1993c〕が最も詳しい。仲尾によれば、通信使側が招宴の前例があることを十分承知した上でこれを頑強に拒絶した背景には、前回の通信使聘礼をめぐる朝鮮側が妥協を余儀なくされたことに対する報復の意図が込められていたのではないかと推測する。そうした意味においては、正徳の聘礼改革によって引き起こされた両国の礼分紛争は、次回の通信使来聘にまで余波が及んだことになる。なお通信使の大仏殿招宴は、これを契機に以後全廃される。

### ③文化期の易地聘礼問題

1811年、老中松平定信の建議によってなされたこの聘礼改革は、国書交換を初めとする行礼の執行地を、江戸ではなく対馬に変更するという異例の略式形態をとった。しかも日本側から通信使派遣延期要請(1788年)と対馬易地聘礼要請(1791年)が出された後、たび重なる交渉と長い膠着状態を経た上でようやく実現した点においても異例である。

この易地聘礼をめぐる複雑な交渉過程や儀礼内容については、田保橋潔による研究が最も詳しく〔田保橋潔1936〕、概論としては〔三宅英利1986a〕〔仲尾宏1997〕〔孫承喆1998〕の論考があるが、全般的にこのテーマについて論じた個別研究は少ない。長正統は、易地聘礼交渉の膠着状態を打開するために朝鮮側訳官と対馬藩通詞の間でなされた中間工作を、両者の往復書簡を分析して解明している〔長正統1978〕。糟谷憲一は、易地聘礼を受容した朝鮮側の財政逼迫状況を、対日輸出品(人参・木綿・米)の調達をめぐる過重負担を示して明らかにしている〔糟谷憲一1979〕。また葛本一雄は、易地聘礼改革に影響を与えた中井竹山『草茅危言』を中心に、当時の日本側知識人の朝鮮蔑視観を論じている〔葛本一雄1998〕。

将軍就任から聘礼執行まで23年もの歳月を要したこの易地聘礼は、財政難による経費節減志向が日朝双方ともに存在したため、最終的に合意に至ったのであるが、両国をとりまく対外環境の

変化が、日朝交隣体制の縮小再編を導いたと言うこともできる。しかし通信使の対馬聘礼は、幕府の出費軽減はかなえられたものの、日本国内における将軍権力の威信誇示という政治的効果は大きく損なわれたといわれている。このため老中水野忠邦は、天保改革(1841年)において、折衷案ともいべき大坂易地聘礼計画を立案する。池内敏によれば、幕府がこの大坂易地聘礼を計画した理由は、西国大名を通信使迎接に動員することによって幕府の権威誇示の機会を復活させ、なおかつ大坂・江戸間の聘礼を省くことによって幕府の出費を抑えるという、一石二鳥の効果を狙ったことにあるという【池内敏1990】。しかし結局この計画は、幕閣の強い反対意見にあって放棄される。以後、幕府は対馬聘礼による通信使迎接を計画するものの、再び財政難を理由に来日延期要請を繰り返し、結果的に通信使来日を実現させぬまま明治維新を迎える。

## 2、通信使の接待と負担

通信使の迎接は、幕府にとって国家の威信を賭けた一大事業であり、多くの大名や一般民衆がこれに動員される。通信使の通行にともなう大名の迎接問題は、三宅英利によって初めて本格的に論じられた。まず【三宅英利1975】は、享保通信使(1719年)に対する藍島での福岡藩の饗応と牛窓での岡山藩の饗応を題材にあげて論考し、また【三宅英利1965・1970】は延享通信使(1748年)に対する小倉藩の領内護送の実態を論じるなど、主に西国大名の事例を取り上げてこの問題を検討している。こうした特定地域の個別実証の成果を前提として、荒野泰典は通信使の迎接と負担の問題を全国レベルで構造的に概観しようと試みる【荒野泰典1979】。

幕府の諸大名に対する動員方法とその時代的変遷については、池内敏の研究が最もよく整理されている【池内敏1991a】。池内は、10万石以下の大名で幕府派遣の代官の下で接待を行う「御馳走人大名」と、10万石以上の大名で接待負担を一任された「自分馳走大名」を比較検討し、接待準備の方法や実務担当者の身分階層、ならびに経費負担の差違を明らかにする。さらに道中人馬役には、狭義の人馬役(主に通信使の荷物搬送用の人馬を負担する課役)と乗馬役(通信使高官用の乗馬を負担する課役)の二種類があり、とくに正徳通信使(1711年)から享保通信使(1719年)を境に、乗馬役の負担基準や負担区間が整備され、かつ接待役と乗馬役の二重賦課が消滅したことを解明している。また【仲尾宏1992】は、通信使の淀川通行における川御座船の船団編成を分析し、多数の西国諸大名の所有船がこれに徴発されていたことを明らかにしている。高正晴子は、道中の休宿地や江戸城にて通信使に供された饗応料理につき、全年次の事例を初めて体系的に整理した【高正晴子2001】。そこでは、七五三膳など調理された饗応料理のみならず、道中にて供給された食糧素材の内容分析にも及んでおり、それらに要した経費がいかに莫大であったかを明らかにしている。

民衆レベルの迎接負担問題を専論した研究は、小林茂の研究から本格的に始まった【小林茂1967】。小林は、通信使の淀川通行に伴う沿岸諸村の負担の実態を、淀藩領内の在村史料を用いて検証している。とくに宝暦通信使(1764年)を事例とし、淀川通行課役と淀宿の人馬課役の負担配分方法をめぐり、周辺農村と淀宿の間で厳しい対立が生じたことを明らかにしている。その後、



通信使の淀川通行に関する課役については、日野照正が別の在村史料を用いて詳しく論考しており、それによれば淀川通行課役を負担する諸村は本郷と助郷の二種に分かれており、前者の村々が淀宿での人馬課役を原則的に免除されていたのに対し、後者の村々は免除されずに二重負担に苦しんでいたという〔日野照正1979〕。通信使通行をめぐる負担の押し付け合いは、宿駅と周辺農村の間のみならず、農村と農村の間においても発生している。尼崎藩領内の在村史料を題材とした〔山下幸子1976〕によると、時代が下るにつれて課税比率が上昇し、諸村の過重負担を招いていることを指摘する。

通信使迎接に関する民衆負担は、沿道地域に限られない。〔正木敬二1978a〕は、通信使の食材供給として、猪肉が信州伊那谷の諸村から供出されていたことを論考する。また通信使の通行に際しては、道中の大河川に船橋が臨時に設置されるが、三浦吉春は富士川の船橋架設を取り上げ、周辺農村からの船・工事資材の調達や工事人足の徴発の有様を明らかにしている〔三浦吉春1985a〕。さらに渡辺和敏は、静岡県内の宿駅・道中を広く対象に据えて、通信使通行時の大名迎接と農村負担について概観している〔渡辺和敏1993〕。とくに、通信使に対する迎接施設の設置や食料供給ならびに人馬負担は、実質的には民間業者の入札による請負形態に担われていたことを指摘し、このことが周辺地域に「通信使特需」ともいべき経済的活性効果をもたらしたことを示唆している。

なお通信使の迎接と負担に関する藩政史料や在地史料は、『朝鮮信使来帆帰帆官録』〔石坂孝二郎編1969〕、『広島藩・朝鮮通信使来聘記』〔頼祺一監修1990〕などの個別刊行史料集をはじめ、近年刊行された市町村史の史料編においても、積極的に収録されるようになっている。最近も、貫井正之らの研究グループによって、岐阜・愛知・静岡県の3県に散在する関連史料が広く紹介された〔貫井正之・小出裕・毛利正勝2001〕。

### 3、文化交流

朝鮮通信使の来日は、江戸時代の日本人が異国人と接触・交流することのできる数少ない機会の一つである。道中の迎接地において、各地から文人墨客が参集して通信使団員と漢詩や書画を贈答し、文芸・思想など多方面の分野に大きな影響をもたらしたことはよく知られている。

通信使との文化交流のなかで、とくに漢詩の贈答と筆談の応酬(筆談唱和)について、初めて研究を行ったのが松田甲である。すなわち天和通信使(1682年)の団員洪世泰と人見鶴山(幕府儒者)との間の筆談唱和を紹介した論考〔松田甲1926a〕を始め、天和通信使と木下順庵(同)〔松田甲1929b〕、同通信使と板坂晩節斎(磐城平藩儒者)〔松田甲1927a〕、正徳通信使(1711年)と新井白石(幕府儒者)〔松田甲1926c〕、同通信使と稲生若水(加賀藩儒者)〔松田甲1931c〕、同通信使書状官の李東郭と日本側諸文士〔松田甲1931d〕、享保通信使(1719年)団員申維翰と水足博泉(熊本藩儒者)〔松田甲1929a〕、文化通信使(1811年)と高津溜川(会津藩儒者)〔松田甲1928c〕等々、筆談唱和を題材とした論考を輩出する。松田にはこのほか、長州藩の儒者と通信使との詩文唱和〔松田甲1928b〕や、名古屋の儒者と通信使との詩文唱和〔松田甲1931f〕、備後福

禅寺や駿河清見寺における通信使の漢詩遺墨〔松田甲1926d・1929b〕について論じた研究もあり、まさに枚挙にいとまがない。

その後、多田正和・三浦叶・那波利貞らによってこの分野の研究は断続的に進められていく。多田正和は、正徳通信使(1711年)と接触した日本側儒者を、木下順庵門下・荻生徂徠門下・伊藤仁斎門下など学派ごとに分類して検討を加えた〔多田正和1936〕。三浦叶は、備前牛窓にて通信使と詩文唱和した岡山藩の儒者に焦点を絞り、当地で編纂された詩文集を紹介している〔三浦叶1936〕。また那波利貞は、宝暦通信使(1764年)と道中を共にした那波魯堂の唱和詩文を網羅的に紹介している〔那波利貞1967〕。しかしこれらの研究は、時期・地域・人物を特定した事例紹介研究の域にとどまっており、筆談唱和の世界を包括的に把握しようとしたものではなかった。

この課題に初めて取り組んだ李元植は、文化通信使(1811年)来日時の筆談唱和を論じた研究〔李元植1974〕を皮切りに、各使行の筆談唱和に関する論考を次々と発表する〔李元植1977・1980b・1981・1985a・1985c・1986a・1988・1991・1993・1994〕。また日本各地に分散していた通信使の遺墨を発掘し、紹介なども精力的に行っている〔李元植1978・1979・1987〕。これらの一連の成果を集大成した〔李元植1997〕は、通信使と日本側文人の筆談唱和の動向を通年的に概観できる数少ない論著として貴重である。

これらの論考と前後して、他の諸氏による個別研究も続々登場した。佐藤正巳は、松江藩の儒者と享保通信使(1719年)および延享通信使(1748年)との間における唱和詩文を発掘し、これを紹介した〔佐野正巳1980〕。信原修は、享保通信使(1719年)軍官鄭後僑の使行記録を題材として、対馬藩の儒者雨森芳洲ならびに松浦霞沼と唱和した詩文の内容を検討し、日朝交隣のあるべき姿を論じている〔信原修1992〕。

1996年になると、通信使と詩文唱和を特集テーマとした『季刊日本思想史』第49号が刊行される。ここに収録された論文のうち、李東郭が詠んだ詩に見える「社交辞令」の手法を分析した〔鈴木健一1996〕は興味深い。すなわち李東郭の詩には、相手の日本人の詩才を賞賛するか、日本の国土を賞賛するか、どちらか二つの傾向が見られるという。前者の応用編としては相手の先祖や師匠を誉めるパターンがあり、例えば林家に贈答した詩文にはこの技法が用いられ、また後者の場合は富士山を賞賛の対象とするものが多いとする。ただしこうした賞賛は、李東郭にとってみれば単に相手を喜ばせる外交辞令に過ぎず、本心では強い優越感を抱いていたことが詩文の端々に見て取れると指摘する。逆に日本側文人の詩の特徴について触れた〔徳盛誠1996〕によると、通信使側が自己の無知無能を詩のなかで恥じてみせるのに対して、日本側文人の詩にはそうした自己謙遜表現を記した事例が無く、詠み手の存在感が欠如している傾向が強いとする。このほか〔日原傳1996〕は、岡島冠山が通信使に詩文を送って唱酬の詩文を執拗に求めた有様を論じ、また〔杉田昌彦1996〕は、詩文唱酬の輪から疎外された荻生徂徠門下の儒者たちについて論考している。

通信使との詩文唱和の研究に比べて、他の文化交流について触れたものは数が少ない。そのうち随行画員と彼らの描く朝鮮絵画に関しては、吉田宏志と山内長三の研究があげられる。吉田

は、来日した画員の氏名経歴や伝来作品を整理概観し、日朝両国の画壇に及ぼした画風の相互交流について論考する。特に寛永13年(1636)と同20年(1643)に来日した金明国の作品に注目し、それらがいずれも日本人好みの禅画風の洒脱な筆法をもって描かれ、しかもその画風が帰国後のソウルの画壇で一時的にせよ流行したと指摘する〔吉田宏志1977・1979・1992〕。また山内長三は、延享通信使(1748年)画員の李聖麟と大坂の絵師大岡春卜、宝暦通信使(1764年)画員の金有声と池大雅など、通信使の画員と日本人絵師との間でなされた交流について論考している〔山内長三1984・1987a〕。

やや特異な研究としては、医学に関する交流がある。〔田代和生1999〕は、朝鮮医学に強い関心を抱く徳川吉宗の命により、享保通信使(1711年)の来日時に、薬材名の照合を目的とした医事問答が試みられたことを明らかにしている。また〔杉仁2001〕は、通信使が日本で得た文物が、清国にまで伝播していたことを発見している。これによると、古代日本の石碑として名高い多胡碑の模本を、①宝暦通信使(1764年)団員の成大中が江戸の文人を介して入手し、それが②さらに燕行使の趙乗亀の手を経て清国へ持ち込まれ、当地の金石家の高い評価を得たこと、等を明らかにされている。換言すれば、日本・朝鮮・清国の三国が、多胡碑という文物を通じて一つの輪をなしたといえることができよう。通信使をめぐる文化交流は、日朝関係のみならず、広く東アジア全域を見据えて行う必要があることを、この研究は示唆している。

#### 4、 民衆文化への影響

日本の街道を練り歩く通信使一行は、彼らを見聞した民衆社会と文化へも多大な影響を与えることになる。日本各地に遺された祭礼の中から通信使の痕跡を発掘しようとする試みは、1960年代後半以降、西川宏・李進熙・辛基秀らによって始められた。その第一の対象となったのが、岡山県牛窓町に伝わる「唐子踊り」である。これは異国風の笠と装束を着した男子二名が、異国風の掛け声をあげながら連れ舞いを踊るもので、地元では長らく、「神宮皇后が三韓征伐から帰朝する途中、朝鮮から連れ帰った童子に舞わせたのが起源である」と信じられてきた。これを〔西川宏1965・1969〕は、「三韓征伐」起源説を否定し、牛窓に寄港した通信使によって伝授された童子の舞いが起源であると初めて提唱する。〔李進熙1979〕も西川と同様の見解を示し、牛窓の唐子踊りのほか、岐阜県大垣市に残存する朝鮮山車を紹介し、これらの祭礼が通信使と地元民との温かい交流から生まれとを指摘している。また〔辛基秀1985・1995b〕も、各地の唐子踊りや唐人踊りの事例を、現在興行されていないものも含めて広く紹介し、その起源を通信使と積極的に結びつけて解釈している。通信使との関係が主張され、現在も興行されている祭礼は、岡山県牛窓町の唐子踊り、三重県津市分部町の唐人踊り、同県鈴鹿市東竹垣町の唐人踊りの三件である。

ただし全ての唐子踊りや唐人踊りが、通信使から直接伝授されたものかどうかは一考を要する。例えば牛窓の唐子踊りについて言えば、通信使一行の童子の連れ舞いを見て感心した地元住民が、長崎系の唐人踊りと御船歌の唐人唄を取り入れて創作したという説もある〔柳沢新治1978〕。倉地克直は、牛窓の唐人踊りの創始年代を再検討した結果、古く見積もっても文政期(1818年～

1830年)をさかのぼることができないことを指摘している〔倉地克直2001〕。牛窓に通信使が寄港した最後の年は1764年であることから、当地の唐子踊りは国内から二次的に伝播した可能性も出てくる。また東竹垣町の唐人踊りについては、文政期に江戸や長崎で大流行した中国風踊りの系統を引く芸能ではないかという指摘も出されている〔柳沢新治1980〕。

ロナルド・トビは、江戸時代の日本人が祭礼において「唐人」に仮装することの意義について、考察を行っている。トビは、江戸の天下祭(日枝神社の山王祭と神田明神の神田祭)で催された「唐人行列」に注目し、町人たちが朝鮮通信使に仮装することで将軍への拝謁の機会を得、一方、将軍側も滅多に来日しない朝鮮通信使の代替物としてこれを受け入れ、あたかも自身が定期的に朝鮮人を来朝させて、公儀の威光を異国に発揮しているかのごとく装うことができたと言及〔トビ、ロナルド1988〕。また中野光浩は和歌山東照宮、津の八幡神社、岡山東照宮、大垣八幡宮、名古屋東照宮のほか、通信使の行路から遠く離れた仙台東照宮の祭礼においても唐人行列が興行されていたことを明らかにしている。もっとも祭礼に登場する唐人行列は、実際の朝鮮通信使の姿を忠実に再現したものではなく、たとえば和歌山東照宮の唐人行列の装いは、中国・朝鮮・南蛮の三要素が混在しており、あくまでも当時の一般民衆が想像した主観の産物であったという〔中野光浩1996〕。また〔倉地克直2001〕は、日本各地の東照宮で唐人行列が取り入れられるようになった契機として、通信使の日光山来訪(1636年・1643年・1655年)との関連性を指摘している。

文芸作品のなかにも、通信使は様々な形に姿を変えて登場する。まずはじめに、〔角田豊正1979〕は明和4年(1767)に大坂で上演された「世話料理鱸庖丁」(のち「今織蝦夷錦」に改作)をはじめ、寛政元年(1789)の「漢人韓文手管始」(歌舞伎)、同4年(1792)の「世話仕立唐繡針」(浄瑠璃)等々、江戸時代後期の歌舞伎や浄瑠璃で演じられる作品に、通信使を題材にとりあげたものが意外に多いことを指摘する。これを承けて、文芸作品の中における通信使のありかた、あるいは日本人の異国人観を、日朝交流史と相互認識の立場から詳細に検討したのが池内敏の一連の研究である。池内は、これらの作品の底流にある 宝暦14年(1764)の「鈴木伝蔵事件」(対馬藩の通詞鈴木伝蔵が、通信使中官崔天宗を大坂の宿所で刺殺し、逃亡後に処刑された事件)の顛末を徹底的に解明し、前代未聞の殺人事件が、通信使はもとより幕府や対馬藩を震撼させ、原因究明、事後処理の過程をめぐって深刻な認識のズレが生じ、以後の日朝関係に様々な後遺症を遺したことを明らかにする〔池内敏1991b・1991c・1992〕。さらに池内は、この殺人事件の伝聞を記した民間記録や、事件を脚色して創作した小説や演劇の内容を比較検討し、事実がどのように歪曲・誇張されて文芸作品が創られていくのか、当時の日本民衆の対朝鮮優越観とその形成過程を詳細に論じる〔池内敏1993・1999〕。

庶民の絵画資料にも、海上や河川における通信使の船団の光景、陸路における行列の様子などが登場する。通信使を題材とした絵馬・絵図・浮世絵・刷物などの絵画資料の発掘と紹介に関しては、辛基秀の長年の尽力によるところが大きい〔辛基秀1985a・1987・1995a・1998・1999〕。トビは、農民が神社に奉納した通信使絵馬について論考し、絵馬のなかには阿弥陀来迎図のような構図をもって通信使の行列を描いたものがあることを指摘している〔トビ、ロナルド1988〕。なお通

信使に係る有形文化財の所在については、仲尾宏を中心とする研究グループによって、詳細な調査目録が出されている〔仲尾宏・李元植・辛基秀・吉田宏志・山路興造・山本尚友・菅澤庸子2002〕。

#### 四、今後の研究課題

以上の研究史整理をふまえて、今後、期待される研究課題を列記しておく。

(豊臣政権期～徳川初期)

##### 1、 豊臣政権および徳川初期政権の外交史研究

当該期は、朝鮮をはじめとするアジアの近隣諸国のみならず、スペイン・イギリス・オランダなどのヨーロッパ諸国も機会があるごとに日本へ書簡を送り、国交を開くことを求めていた。これら多様な外国使節と通信使の相違点、あるいは接待などの面で比較検討し、豊臣および初期徳川政権の外交姿勢を再考察する必要がある。

##### 2、 個々の通信使の実態分析

史料的な制約により、後世の通信使研究と比較して、国内における使節の道中警固、接待のあり方などを含めて、まだ解明されていない部分が多い。

##### 3、 宣祖・光海君・仁祖期における朝鮮王朝の外交政策

当該期の研究は、日本側からの視点による分析が多い。戦乱期の朝鮮王朝の外交政策と通信使の位置づけを、より積極的に論じていく必要がある。

(1636年以降)

##### 4、 燕行使と通信使の比較検討

燕行使とは、朝鮮王朝が明国や清国に派遣した朝貢使節団を指し、冬至使などの定期使節と、謝恩使などの臨時使節などからなる。近世を通じて12回しか派遣されなかった通信使と比べると、燕行使の場合はたとえば1637年～1894年までの間に513回もの使行を数えることができ、その派遣頻度ははるかに高い。〔糟谷憲一1992〕によると、使節の正使・副使の品階は、通信使より燕行使の方が一段高かったことが指摘されているが、ここで問題となるのは、通信使の団員となった者が、燕行使の団員にも任命されている事例を散見できる点である。朝鮮官人の職歴の上で、両使節が各々どのような位置づけをされていたのか、今後詳しく検討する必要がある。また燕行使・通信使の両使節を体験した者を通じて、日本情報や中国情報を双方へどのように伝播したか、比較検討されることが期待される。

## 5、 訳官使節に対する研究

訳官使節とは、朝鮮王朝から対馬藩へ派遣された使節で、司訳院の倭学訳官(日本語通訳)が正使・副使に任命される。1629年～1861年の間に56回も派遣されており、これも通信使の派遣頻度をはるかに上回る。その使命は、徳川将軍の慶弔や対馬藩主の慶弔、対馬藩主の帰島に対する慰問、通信使派遣に関する事前協議などがあるが、通信使と同様、対馬が様々な外交儀礼を取り行っており、どちらかという実務外交を目的としない通信使の役割を補完するような存在となっている。日朝関係史研究において重要な課題であるにもかかわらず、二～三の個別論文([田代和生1994][仲尾宏1995])を除いて、これを専門に論じた日本側の研究は少ない。訳官使節と通信使の比較検討も併せて、今後の研究の進展が望まれる。

## 6、 琉球使節・オランダ使節など、江戸に赴いた他の外国人使節との比較検討

琉球使節は、通信使と同じく1644年に日光山参詣を遂げており、将軍権威の高揚活動に利用されている。また通信使の来日途絶後、異国使節の「入貢」という演出の役割は、もっぱら琉球使節が担っていた感がある。ただし琉球使節の場合は、明らかに幕府から朝貢者として扱われており、その接待や待遇は通信使と比較してかなり劣ると言われている。待遇面における通信使と琉球使節の格差、さらに「外交」の欠如したオランダ使節の江戸参府とも併せて、今後詳しく解明する必要がある。

## 7、 通信使派遣をめぐる朝鮮側の財政的負担の研究

通信使の日本国内の負担に関しては、藩政史や村落史の分野から研究が進んでおり、その加重負担がしばしば農村経済を圧迫したことはよく指摘される場所である。反面、朝鮮国内における通信使の派遣や通過に伴う経費負担の実態については、ほとんど明らかにされていない。朝鮮王朝にとって、通信使派遣はどのような位置づけにあるのか、財政史の分野からの解明が望まれる。

朝鮮通信使(近世編) 文献目録

No.	刊行年	著者	表題	出典
1	1896	内藤耻叟	「豊臣徳川講和始末」	『国家学会雑誌』2-6
2	1897	中村徳五郎	「徳川幕府の初代に於ける朝鮮との旧好回復始末」	『太陽』3-22
3	1898	千住武次郎	「徳川幕初に於ける日韓の交渉」	『太陽』4-12
4	1904	辻善之助	「徳川時代初期に於ける日韓の関係」	『歴史地理・朝鮮号』
5	1904	藤田明	「江戸時代に於ける朝鮮使節来朝について」	『歴史地理・朝鮮号』
6	1914	池内宏	『文禄慶長の役』正編第1	南満州鉄道株式会社
7	1920	栗田元次	「新井白石の政治思想と王号復行問題」	『歴史と地理』5-1・4・5・6
8	1924	三浦周行	「新井白石と復号問題」	『史林』9-3
9	1925	栗田元次	「新井白石の政治思想」	『歴史と地理』15-5
10	1925	武田勝蔵	「正徳信使改札の教諭原本に就て」	『史林』10-4
11	1925	松田甲	「徳川時代の朝鮮通信使」	『朝鮮』122〔松田甲『日鮮史話』1収録〕
12	1926	武田勝蔵	「宗家史料による復号一件」	『史学』5-1
13	1926a	松田甲	「人見鶴山と洪滄浪」	『朝鮮』128〔松田甲『日鮮史話』1収録〕
14	1926b	松田甲	「日光東照宮の扁額と鐘」	『朝鮮』133〔松田甲『日鮮史話』2収録〕
15	1926c	松田甲	「新井白石の詩と朝鮮通信使」	『日鮮史話』2
16	1926d	松田甲	「靉の福禅寺と朝鮮信使」	『朝鮮』140〔松田甲『日鮮史話』3収録〕
17	1926~30	松田甲	『日鮮史話』1~6	朝鮮総督府
18	1927a	松田甲	「韓使を誡めたる板坂晩節斎」	『朝鮮』143〔松田甲『日鮮史話』3収録〕
19	1927b	松田甲	「二百年前の朝鮮物語」	『朝鮮』151〔松田甲『日鮮史話』4収録〕
20	1928	徳島一郎	「新井白石の外交政策」上・下	『歴史と地理』22-3・4
21	1928a	松田甲	「李朝英祖時代 戊辰信使の一行」	『朝鮮』152〔松田甲『日鮮史話』4収録〕
22	1928b	松田甲	「毛利氏の朝鮮聘使接待」乾・坤 1・坤 2	『朝鮮』155〔松田甲『日鮮史話』4収録〕
23	1928c	松田甲	「会津藩と朝鮮」	『朝鮮』161〔松田甲『日鮮史話』5収録〕
24	1929	徳島一郎	「新井白石と徳川幕府の対外文書に於ける將軍の称号に就て」1~3	『歴史と地理』23-1・3・4
25	1929a	松田甲	「水足博泉と申維翰」	『朝鮮』167〔松田甲『日鮮史話』5収録〕
26	1929b	松田甲	「朝鮮に名を博せる木下順庵」	『朝鮮』168〔松田甲『日鮮史話』5収録〕
27	1929c	松田甲	「駿河の清見寺と朝鮮信使」	『朝鮮』171〔松田甲『日鮮史話』5収録〕
28	1930	中村栄孝	「朝鮮人曲馬上覧の起源」	『朝鮮』176〔中村栄孝 1971収録〕

29	1930	松田甲	「江戸城に於ける朝鮮人の曲馬」	『朝鮮』176〔松田甲『続日鮮史話』1収録〕
30	1931a	松田甲	『続日鮮史話』1～3	朝鮮総督府
31	1931b	松田甲	「朝鮮通信使と近江路」	『続日鮮史話』1
32	1931c	松田甲	「正徳朝鮮通信使と加賀の学者」	『続日鮮史話』2
33	1931d	松田甲	「日本に名を留めたる李東郭」	『続日鮮史話』2
34	1931e	松田甲	「東人詩話の翻刻」	『続日鮮史話』2
35	1931f	松田甲	「名古屋の儒者と朝鮮の文士」	『続日鮮史話』3
36	1934	中村栄孝	「江戸時代の日鮮関係」	『岩波講座日本歴史』(旧版)岩波書店〔中村栄孝 1969b 収録〕
37	1936	多田正和	「正徳辛卯朝鮮通信使と日本の漢文学」	『斯文』18-2
38	1936	田保橋潔	「朝鮮国通信使易地行聘考」	『東洋学報』23-3・4、24-2・3〔田保橋潔 1940 収録〕
39	1936	三浦叶	「朝鮮通信使と備前漢文学界」	『東洋文化』148
40	1940	田保橋潔	『近代日鮮関係の研究』上・下	朝鮮総督府〔宗高書房 1972 復刻〕
41	1942～43	黒田省三	「朝鮮通信使史話」1～9	『国民文学』2-9・10、3-1～7
42	1947	藤塚鄰	『日鮮清の文化交流』	中文館書店
43	1952	栗田元次	『新井白石の文治政治』	石崎書店
44	1953	伊東多三郎	「殊号問題と将軍の権威」	『日本歴史』67
45	1953a	宮崎道生	「新井白石と朝鮮聘使問題」	弘前大学『人文社会』3〔宮崎道生 1954 収録〕
46	1953b	宮崎道生	「正徳の朝鮮来聘」	『日本歴史』60〔宮崎道生 1954 収録〕
47	1953c	宮崎道生	「国書復号記事批判」	『芸林』4-4〔宮崎道生 1954 収録〕
48	1953d	宮崎道生	「新井白石と趙泰億」	『歴史』5〔宮崎道生 1954 収録〕
49	1954	中村幸彦	雨森芳洲とその外交	『天理大学報』5-5
50	1954	宮崎道生	『新井白石研究序論』	吉川弘文館
51	1956	大塚鑑	「芳洲文庫本「朝鮮信使東槎紀行」について」	『朝鮮学報』10
52	1957	浜田敦	「海行摠載に散見する日本語彙」	『神田博士還暦記念書誌学論集』平凡社
53	1958	宮崎道生	『新井白石の研究』	吉川弘文館
54	1959a	大友信一	『「客館璀璨集」による国語音の研究』	『文芸研究』29
55	1959b	大友信一	『「桑韓筆語」による国語音の研究』	『文芸研究』33
56	1959	村上四男	「延亨五辰五月、朝鮮人饗応献立」について	『(和歌山大学学芸学部)紀要(人文科学)』9
57	1961	内藤雋輔	「李朝史料による日鮮航路について」	『岡山史学』10
58	1961	三宅英利	「李氏肅宗朝の日本聘礼と長州藩—近世日鮮外交の問題点を含めて—」	『九州史学』17
59	1962	田中健夫	「リチャルド・コックスの観た朝鮮使節来朝」	『日本歴史』171〔田中健夫 1982 収録〕
60	1962	三宅英利	「鎖国前後における日鮮関係」	『歴史教育』10-9〔三宅英利 1986a 収録〕



61	1963	長正統	「景轍玄蘇について——外交僧の出自と法系——」	『朝鮮学報』29
62	1963	中村栄孝	「朝鮮通信使点描」	金正柱編『韓来文化の後栄』中。韓国資料研究所
63	1964	長正統	『朝鮮国送使国次之書覚書』の史料的性格」	『朝鮮学報』33
64	1964	中村栄孝	「朝鮮の日本通信使と大坂」	『朝鮮学報』39・40 合併号〔中村栄孝 1969b 収録〕
65	1965	阿部吉雄	『日本朱子学と朝鮮』	東京大学出版会
66	1965	田中健夫	「鎖国成立期日朝関係の性格」	『朝鮮学報』34〔田中健夫 1975 収録〕
67	1965	西川宏	「唐子踊りの謎を解く」	『歴史地理教育』115
68	1965	三宅英利	「近世李朝聘礼使と北九州」	『九州地方史』2
69	1966	中村栄孝	『日本と朝鮮』	至文堂
70	1967	小林茂	「徳川時代における朝鮮通信使の助郷問題——淀藩の場合を中心として——」	『朝鮮学報』43
71	1967	田中健夫	「宗義智」	児玉幸多・木村礎編『大名列伝』〔田中健夫 1982 収録〕
72	1967a	中村栄孝	「前近代アジア外交史上の徳川政権——「日本国大君」外交の成立とその終末——」	『朝鮮史研究会第五回大会報告論文集』
73	1967b	中村栄孝	「外交史上の徳川政権」	『朝鮮学報』45〔中村栄孝 1969b 収録〕
74	1967	那波利貞	「明和元年の朝鮮国修好通信団の渡来と我国の学者文人との翰墨上に於ける応酬唱和の一例に就きて」	『朝鮮学報』42
75	1967	三宅英利	「近世李朝通信使の九州観察」1・2	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』1-1・2
76	1968	内藤雋輔	「帰化医師泉大官とその系譜——附・朝鮮信使迎接日記について」	『朝鮮学報』48
77	1968	中村栄孝	「日光徳川家康廟社堂扁額の模本について」	『朝鮮学報』49
78	1968	三宅英利	「近世李朝通信使の福岡藩観察」	竹内理三『九州史研究』お茶の水書房〔三宅英利 1986a 収録〕
79	1969	石坂孝二郎編	『朝鮮信使来朝帰帆官録』	岡方古文書刊行会〔1992 増補。明石書店〕
80	1969a	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』中	吉川弘文館
81	1969b	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』下	吉川弘文館
82	1969	西川宏	「牛窓港に伝わる朝鮮の踊り」	『日本のなかの朝鮮文化』3
83	1969	三宅英利	「李氏孝宗朝日本通信使考」	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』3-1〔三宅英利 1986a 収録〕
84	1969	矢沢康祐	『江戸時代』における日本人の朝鮮観について」	『朝鮮史研究会論文集』6
85	1970	岡田精司	「朝鮮人街道のこと」	『日本のなかの朝鮮文化』6
86	1970	中村栄孝	「解説:『蓬萊故事』について——17 世紀日鮮関係の一史料」	『朝鮮学報』57
87	1970	三宅英利	「李氏英祖朝初回通信使と小倉藩」	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』4-1〔三宅英利 1986a 収録〕
88	1971	中村栄孝	『朝鮮——風土・民族・伝統一』	吉川弘文館
89	1971	三宅英利	「鎖国直後の朝鮮通信使」	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』5-1・2 合併号〔三宅英利 1986a 収録〕
90	1972	朴春日	『紀行・朝鮮使の道』	新人物往来社

91	1972	三宅英利	「近世朝鮮王朝日本観の展開」	『北九州大学開学二五周年記念論文集』
92	1973	中村栄孝	「豊臣秀吉の日本国王冊封に関する誥命・勅諭と金印について」	『日本歴史』300
93	1973	三宅英利	「元和朝鮮通信使来聘理由への疑問」	『九州史学』52〔三宅英利 1986a 収録〕
94	1974	李元植	「朝鮮純祖辛未通信使の来日について—対馬に於ける日韓文化交流を中心に—」	『朝鮮学報』72〔李元植 1997 収録〕
95	1974	姜在彦	「朝鮮人の日本観—江戸期朝鮮通信使の日本紀行を中心として」	『経済評論』23-12
96	1974	姜在彦	訳注・申維翰『海游録』	平凡社 東洋文庫
97	1974	中村栄孝	「大君外交の国際認識—華夷秩序のなかの日本—」	『国際政治』51
98	1974a	三宅英利	「天和朝鮮信使考」	森克己博士古稀記念会編『史学論集・対外関係と政治文化』1。吉川弘文館〔三宅英利 1968a 収録〕
99	1974b	三宅英利	「寛永十三年朝鮮信使考」	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』6〔三宅英利 1986a 収録〕
100	1974c	三宅英利	「寛永初回の朝鮮信使」	『九州史学』53・54 合併号〔三宅英利 1986a 収録〕
101	1975	田中健夫	『中世対外関係史』	東京大学出版会
102	1975	三宅英利	「享保朝鮮信使考」	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』7〔三宅英利 1986a 収録〕
103	1976	李進熙	『李朝の朝鮮通信使—江戸時代の日本と朝鮮—』	講談社
104	1976	内藤雋輔	『文禄慶長役における被擄人の研究』	東京大学出版会
105	1976	山下幸子	「朝鮮信使の来朝」	尼崎市立地域研究史料館『地域史研究』6-1
106	1977	泉澄一	「江戸時代、日朝外交の一側面—対馬以酩庵輪番制度と関係史料について」	『紀要』(関西大・東西学術研)10
107	1977	李元植	「明和度(一七六四)の朝鮮国信使—成大中との筆談唱酬詩巻を中心に—」	『朝鮮学報』84〔李元植 1997 改題収録〕
108	1977	李進熙	「雨森芳洲の朝鮮語」	『季刊三千里』11
109	1977	水田紀久	「芳洲退休前後」	『文芸論叢』(大谷大)8
110	1977	三宅英利	「宝暦朝鮮信使考」	『北九州大学開学三十周年記念号』〔三宅英利 1986a 収録〕
111	1977	三宅英利	「徳川政権初回の朝鮮信使」	『朝鮮学報』82〔三宅英利 1986a 収録〕
112	1977	吉田宏志	「李朝の画員金明国について」	『日本のなかの朝鮮文化』35
113	1977	ロナルド・トビ	「初期徳川外交における『鎖国』の位置付け—幕府正当性の確立の問題からみて—」	社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めて』〔ロナルド・トビ 1990 収録〕
114	1978	李元植	「江戸時代における朝鮮国信使の遺墨について—墨蹟目録—」	『朝鮮学報』88〔李元植 1997 収録〕
115	1978	長正統	「倭学訳官書簡よりみた易地行聘交渉」	『史淵』115
116	1978	田中健夫・田代和生校訂	「朝鮮通交大紀」	名著出版
117	1978a	正木啓二	「朝鮮通信使と伊那の猪」1~3	『伊那』26-5~7
118	1978b	正木啓二	「続・朝鮮通信使」	『伊那』26-8
119	1978	三宅英利	「文化朝鮮信使考—易地聘礼の成立—」	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』11〔三宅英利 1986a 収録〕

120	1978	柳沢新治	「唐子踊りの謎を解く」	『歴史と人物』1978年12月号
121	1979	荒野泰典	「朝鮮通信使の終末—申維翰「海游録」によせて—」	『歴史評論』355
122	1979	李元植	「朝鮮通信使の遺墨」	[映像文化協会編 1979収録]
123	1979	李進熙	「唐子踊りと朝鮮」	[映像文化協会編 1979収録]
124	1979	上田正昭	「朝鮮通信使と雨森芳洲」	[映像文化協会編 1979収録]
125	1979	映像文化協会編	『江戸時代の朝鮮通信使』	毎日新聞社
126	1979a	大瀧晴子	「日光と朝鮮通信使」	[映像文化協会編 1979収録]
127	1979b	大瀧晴子	「日光と朝鮮通信使—寛永13年の通信使—」	『朝鮮史叢』1
128	1979c	大瀧晴子	「日光と朝鮮通信使—寛永20年の通信使—」	『朝鮮史叢』2
129	1979	糟谷憲一	「なぜ朝鮮通信使は廃止されたか」	『歴史評論』355
130	1979	姜在彦	「朝鮮通信使と鞆の浦」	[映像文化協会編 1979収録]
131	1979	田代和生	「対馬藩の倭館貿易」	[映像文化協会編 1979収録]
132	1979	角田豊正	「朝鮮通信使と歌舞伎」	[映像文化協会編 1979収録]
133	1979	中村栄孝	「江戸時代の朝鮮通信使」	[映像文化協会編 1979収録]
134	1979	日野照正	「外国人時節の淀川往返と綱引役、水尾浚役—朝鮮通信使来朝の場合—」	『地方史研究』162
135	1979	吉田宏志	「朝鮮通信使の絵画」	[映像文化協会編 1979収録]
136	1980a	李元植	江戸時代の朝鮮通信使	『韓国文化』2-1
137	1980b	李元植	「朝鮮通信使と深見玄岱—『日光山八景和韻』詩書巻を中心に—」	『日本歴史』384[李元植 1997収録]
138	1980	大瀧晴子	「明暦の朝鮮通信使」	『朝鮮史叢』3
139	1980	佐野正巳	「和韓唱酬における雲藩儒者の活躍—長沢二子(東海・楽浪)と桃白鹿—」	神奈川大学『人文学研究所報』14
140	1980	杉谷明	「朝鮮国遣使」の再検討	『日本歴史』382
141	1980a	田代和生	「寛永六年御上京之時毎日記」	『朝鮮学報』95
142	1980b	田代和生	「寛永六年(仁祖七年・一六二九)対馬使節の朝鮮国『御上京之時毎日記』とその背景(一)」	『朝鮮学報』98
143	1980	三宅英利	「新井白石の聘礼改変と朝鮮王朝」	北九州大学文学部『紀要(B系列)』13
144	1980	柳沢新治	「唐子踊りに秘められた郷愁」	『歴史と人物』1980年6月号
145	1981	荒野泰典	「大君外交体制の確立」	『講座日本近世史』2、有斐閣[荒野泰典 1988収録]
146	1981	李元植	「天和度(1682)朝鮮信使裨将洪世泰と日本文士との筆談唱和について」	『朝鮮学報』98[李元植 1997収録]
147	1981	大瀧晴子	「朝鮮使節のみた江戸と江戸城—慶長から明暦まで—」	『歴史手帖』9-4
148	1981	佐野正巳	「朝鮮通信使と山田復軒」	神奈川大学『人文学研究所報』15
149	1981	杉原隆	「朝鮮通信使と雲石諸藩の負担」	『山陰史談』17
150	1981a	田代和生	『近世日朝通交貿易史の研究』	創文社

151	1981b	田代和生	「寛永六年(仁祖七年・一六二九)対馬使節の朝鮮国「御上京之時毎日記」とその背景(二)」	『朝鮮学報』98
152	1981	中村栄孝	「己酉約条再考」	『朝鮮学報』101
153	1981	藤井譲治	「朝鮮通信使と幕府初期の外交政策」	岩見宏編『東アジアにおける国際秩序の形成と展開』
154	1982	北九州大学古文書研究会	『小笠原文庫・対州御在館中日記・対州御滞留日記』	高塔印刷
155	1982	田中健夫	『対外関係と文化交流』	思文閣出版
156	1982	仲尾宏	「江戸時代の朝鮮通信使と京都」	京都精華大学『木野評論』13〔仲尾宏 1993a 収録〕
157	1982	三宅英利	『朝鮮観の史的展開』	北九州大学生協
158	1982	山本秀夫	「朝鮮通信使と岡山藩」	『岡山地方史研究会会報』32
159	1983	大瀧晴子	「日光山輪王寺にのこる韓国文化—江戸時代の善隣外交の果実—」	『韓国文化』5-10
160	1983	姜在彦	「前近代の東アジア世界と朝鮮—朝鮮の「事大」と「交隣」」	『季刊三千里』33
161	1983	田代和生	『書き替えられた国書』	中央公論社
162	1983	芳賀登	「朝鮮通信使と対馬」	『韓国文化』5-8
163	1983	八尾啓介	「外交文書にみる近世初期の徳川政権」	藤野保先生還暦記念会編『近世日本の政治と外交』雄山閣出版
164	1984	明石善之助	「福岡と朝鮮通信使」	『季刊三千里』37
165	1984	李元植	「朝鮮通信使に随行した倭学訳官について—捷解新語の成立時期に関する確証を中心に—」	『朝鮮学報』111〔李元植 1997 収録〕
166	1984	井上朋義	「朝鮮通信使と見物船—播磨灘沖での交歓」	『韓国文化』6-9
167	1984	大瀧晴子	「江戸っ子の見た朝鮮信使」	『季刊三千里』37
168	1984	姜在彦	「室町・江戸時代の善隣関係」	『季刊三千里』37
169	1984	西川宏	「靉・日比・牛窓の交流」	『季刊三千里』37
170	1984	貫井正之	「通信使, 尾張をゆく」	『季刊三千里』37
171	1984	山内長三	『朝鮮の絵・日本の絵』	日本経済新聞社
172	1985a	李元植	「新井白石と朝鮮通信使—筆談と唱和を中心に—」	宮崎道生編『新井白石の現代的考察』吉川弘文館〔李元植 1997 収録〕
173	1985b	李元植	「新井白石と朝鮮通信使」	『韓国文化』7-7〔李元植 1997 収録〕
174	1985c	李元植	「韓天寿と朝鮮通信使」	『近畿文化』430〔李元植 1997 収録〕
175	1985	石井正敏	「朝鮮通信使関係研究文献目録」	『特別展示朝鮮通信使図録』東京国立博物館
176	1985	市川正明	「李朝の通信使—江戸時代の日本と朝鮮」	『韓国文化』7-2
177	1985	姜在彦	「朝鮮通信使(1)—江戸時代の朝鮮通信使」	『韓国文化』7-6
178	1985	李元植	「朝鮮通信使(2)—新井白石と朝鮮通信使」	『韓国文化』7-7
179	1985	李進熙	「朝鮮通信使(2)—雨森芳州と玄錦谷」	『韓国文化』7-7

180	1985	辛基秀	「朝鮮通信使(3)－朝鮮通信使の新しい史料:絵馬・絵画・日記…」	『韓国文化』7-8
181	1985	三浦吉春	「朝鮮通信使(4)－富士川の船橋:朝鮮通信使だけの特権, (6)－通信使来訪による東海道整備と村方負担」	『韓国文化』7-9
182	1985	吉田宏志	「朝鮮通信使(5)－朝鮮通信使と洛中洛外図」	『韓国文化』7-10
183	1985	三浦吉春	「朝鮮通信使(6)－通信使来訪による東海道整備と村方負担」	『韓国文化』7-11
184	1985	辛基秀	「朝鮮通信使(6)－祭の中の朝鮮通信使」	『韓国文化』7-11
185	1985a	辛基秀	「朝鮮通信使の新しい資料・絵馬・絵画・日記」	『韓国文化』7-8
186	1985b	辛基秀	「祭の中の通信使」	『韓国文化』7-11
187	1985	金焯泰	「『方長老』と南部藩一徳川・朝鮮外交の舞台裏を中心に」	『韓国文化』
188	1985	高橋公明	「慶長十二年の回答兼刷還使の来日についての一考察」	『名古屋大学文学部研究論集』XC II 史学 31
189	1985	鄭夏美	「朝鮮通信使の江戸入府－江戸の町触と信使記録の関連から」	『人間文化研究年報』(お茶の水女子大) 8
190	1985a	仲尾宏	「朝鮮通信使と京・近江」	上田正昭ら編『日本と朝鮮の2000年』大阪書籍
191	1985b	仲尾宏	「通信使外交の終焉と明治維新」	『岡本清一先生傘寿記念論集』法律文化社〔仲尾宏 1993b 収録〕
192	1985a	三浦吉春	「富士川の船橋」	『韓国文化』7-9
193	1985b	三浦吉春	「通信使来訪による東海道整備と村方負担」	『韓国文化』7-11
194	1985	三宅英利	「朝鮮官人の白石像」	宮崎道生編『新井白石の現代的考察』吉川弘文館〔三宅英利 1986a 収録〕
195	1986a	李元植	「林羅山と朝鮮通信使」	『朝鮮学報』119・120 合併号〔李元植 1997 収録〕
196	1986b	李元植	「韓国研究院所蔵朝鮮通信使関連資料について－付資料目録－」	『韓』102
197	1986	上野日出刀	「雨森芳洲について(2)」	『活水論文集』(活水女子短大) 29
198	1986	国重顕子(佐島顕子)	「豊臣政権の情報伝達について」	『九州史学』96
199	1986a	辛基秀	「朝鮮と紀州徳川家の交流－儒者李真栄と頼宣」	『韓国文化』8-7
200	1986b	辛基秀	「朝鮮と紀州徳川家の交流(2)－李梅溪と光貞・吉宗」	『韓国文化』8-9
201	1986	仲尾宏	「『隔蔘記』の時代と朝鮮通信使」	京都精華大学『木野論評』17〔仲尾宏 1993b 収録〕
202	1986	芳賀登	「朝鮮通信使と日韓文化交流」	『日韓文化交流史の研究』雄山閣出版
203	1986a	三宅英利	『近世日朝関係史の研究』	文献出版
204	1986b	三宅英利	「朝鮮使節の来朝」	大石慎三郎編『海外視点 日本の歴史』10。ぎょうせい
205	1986	ロナルド・トビ	* 近世における日本型華夷観と東アジアの国際関係 佐藤正幸訳	『日本歴史』463
206	1987	李元植	「朝鮮通信使のもたらした書跡」	『韓国美術3 李朝美術』講談社
207	1987	李進熙	『江戸時代の朝鮮通信使』	講談社
208	1987	辛基秀	「淀川の黄金船－朝鮮通信使船行－群馬県土岐家秘蔵の絵画－」	『韓国文化』8-7・9
209	1987	鶴田啓	「近世の日朝関係」	『歴史と地理』382

210	1987	仲尾宏	「本能寺と朝鮮通信使—享保度通信使の京都所在—」	京都芸術短期大学『瓜生』10〔仲尾宏 1993a 収録〕
211	1987	三宅英利	「近世日朝交流の特質」	北九州大学文学部『紀要』開学 40 周年記念号
212	1987a	山内長三	「李聖麟と崔北一寛延度通信使随行画員について—」	『中吉先生喜寿記念 朝鮮の古文化論讃』国書刊行会
213	1987b	山内長三	「通信使画員の絵」	『韓国美術3 李朝美術』講談社
214	1988	荒野泰典	『近世日本と東アジア』	東京大学出版会
215	1988	李元植	「朝鮮通信使の訪日と筆談唱和」	『韓』110〔李元植 1997 収録〕
216	1988	田中健夫	「朝鮮修文職と通信使館待」	『韓』110
217	1988	芳賀登	「朝鮮通信使とその接待—誠信交隣と関連させて—」	『韓』110
218	1988a	三宅英利	「近世朝鮮官人の日本天皇観」	箭内健次編『鎖国日本と国際交流』下。吉川弘文館
219	1988b	三宅英利	「朝鮮通信使と西国諸藩」	『韓』110
220	1988	吉田忠	「朝鮮通信使の医事問答」	『研究報告』(東北大・日本文化研)24
221	1988	ロナルド・トビ	「近世日本の庶民文化に現れる朝鮮通信使像—世俗・宗教上の表現—」	『韓』110
222	1989	荒野泰典	「近世の日朝関係」	歴史学研究会編『日朝関係史を考える』(青木書店)
223	1989	李元植	「朝鮮通信使の訪日と文化交流」	『ビブリア』(天理図書館)93
224	1989	高柄翊	「群倭瑠花瑤草—朝鮮通信使の日本観」(上), (中), (下)	『韓国文化』117、118、119
225	1989	高正晴子	「天和二年の朝鮮通信使の室津における饗応をめぐる」	梅花短期大学『研究紀要』37
226	1989	田代和生	「近世の日朝関係と対馬」	『朝鮮史研究会論文集』26
227	1989	仲尾宏	『前近代の日本と朝鮮—朝鮮通信使の軌跡—』	明石書店
228	1989	原田大道	「朝鮮信使副丈ト船の構造について」	長崎総合科学大学『紀要』30-1
229	1989	若松実	『日本往還日記: 壬辰倭乱・文禄の役に於ける明国冊封使・朝鮮通信使の和親交渉の記録』	日朝協会愛知県連合会
230	1990	李元植	「朝鮮通信使と江戸時代の文人たち」	近畿大学『文学・芸術・文化』1
231	1990	池内敏	「朝鮮信使大坂易地聘礼計画をめぐる」	『日本史研究』336
232	1990	姜在彦	「韓日文化交流—雨森芳洲の誠信外交」	『季刊コリアナ』3-3
233	1990	北島万次	『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』	校倉書房
234	1990	金義煥	「趙曠が見た 18 世紀後期の日本社会と韓日関係—『海槎日記』を中心に」	『季刊コリアナ』3-4
235	1990	高正晴子	「天和二年の朝鮮通信使の江戸より風本にいたる下向の饗応記録—主に食糧の調達について—」	梅花短期大学『研究紀要』38
236	1990	田代和生	「朝鮮通信使行列絵巻の研究」	『朝鮮学報』137
237	1990	鶴田啓	「近世日朝貿易と日朝接触の特質」	『歴史評論』481
238	1990	仲尾宏	「朝鮮使節と大徳寺」	京都芸術短期大学『瓜生』12〔仲尾宏 1993a 収録〕
239	1990	永積洋子	『近世初期の外交』	創文社

240	1990	信原修	「雨森芳洲と玄徳潤—『誠信堂記』をめぐって(上),(下)」	『韓国文化』12-11、12
241	1990	信原修	『『誠信堂記』をよむ』	『朝鮮学報』136
242	1990	三宅英利	「前近代朝鮮官人の「日本将軍」観—国交再開期～制度確立期—」	北九州大学文学部『紀要(B 系列)』22
243	1990	三宅理一	『江戸の外交都市』	鹿島出版会
244	1990	頼祺一監修	『広島藩・朝鮮通信使来聘記』	呉市・安芸郡下蒲刈町
245	1990	ロナルド・トビ	『近世日本の国家形成と外交』速水融・永積洋子・川勝平太訳	創文社。原題『State and Diplomacy in Early Modern Japan, Asia in the Development of the Tokugawa Bakufu』Princeton Univ.Press
246	1991	李元植	「朝鮮通信使の訪日と文化交流—使行録と筆談唱和集を中心に—」	『慕山文化』2〔李元植 1997 収録〕
247	1991a	池内敏	「近世中期の朝鮮通信使」	尼崎市立地域研究史料館『地域史研究』21-1
248	1991b	池内敏	「近世後期における対外観と『国民』」	『日本史研究』344
249	1991c	池内敏	「崔天宗殺害事件をめぐる徳川幕府と対馬藩」	『ヒストリア』132
250	1991	田代和生	「対馬藩の朝鮮語通詞」	慶応大学『史学』60-4
251	1991	仲尾宏	「江戸の朝鮮通信使—軍役と民衆の接点を中心に—」	京都芸術短期大学『瓜生』13〔仲尾宏 1993a 収録〕
252	1991	三木栄	『増訂 朝鮮医学史及疾病史』	思文閣出版
253	1991	関徳基	「新井白石の『日本国王』復号論」	瀧澤武雄編『中近世の史料と方法』東京堂出版
254	1991	米谷均	「対馬藩の朝鮮通詞と雨森芳洲」	『海事史研究』48
255	1992	李元植・大畑篤四郎・辛基秀・田代和生・田中健夫・中尾宏・吉田宏志・李進熙	『朝鮮通信使と日本人』	学生社
256	1992	李進熙	『江戸時代の朝鮮通信使』 [李 1987]の文庫版	講談社
257	1992	池内敏	「崔天宗殺害事件における日朝相互認識」	鳥取大学教養学部『紀要』26
258	1992	糟屋憲一	「近代的外交体制の創出」	荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史』II。東京大学出版会
259	1992	佐島顕子	「秀吉の「唐入り」構想の挫折と小西行長の講和交渉」	福岡女学院大学『紀要』2
260	1992	仲尾宏	「大阪の朝鮮使節」	京都芸術短期大学『瓜生』14〔仲尾宏 1993a 収録〕
261	1992	信原修	「鄭後僑『扶桑紀行』にみる交隣と誠信」	『朝鮮学報』142
262	1992	朴春日	『朝鮮通信使史話』	雄山閣出版
263	1992	吉田宏志	「通信使と画家の交流」	〔李元植ら 1992 収録〕
264	1993	李元植	「淀川と朝鮮通信使」	『淀川文化考』〔李元植 1997 収録〕
265	1993	李啓煌	「慶長の役後の国際関係—講和交渉における日本・朝鮮・明の動向—」	『史林』76-6〔李啓煌 1997 収録〕
266	1993	池内敏	「文芸作品と朝鮮通信使」	『青丘学術論集』3
267	1993	紙屋敦之	「大君外交と近世の国制」	早稲田大学大学院文学研究科『紀要』38

268	1993a	辛基秀	『朝鮮通信使往来』	労働経済社
269	1993b	辛基秀編	『わが町に来た朝鮮通信使1』	明石書店
270	1993	辛基秀・仲尾宏編	『体系 朝鮮通信使』4・8	明石書店
271	1993	鈴木えりも	「江戸幕府将軍の外交称号」	『歴史の理論と教育』36
272	1993	孫承喆	「朝鮮後期 対日交隣体制の脱中華的性格」	『歴史学研究』647
273	1993a	仲尾宏	『朝鮮通信使と江戸時代の三都』	明石書店
274	1993b	仲尾宏	『朝鮮通信使の軌跡』	明石書店
275	1993c	仲尾宏	「朝鮮使節と京都大仏殿招宴問題」	京都芸術短期大学『瓜生』15〔仲尾宏 1993a 収録〕
276	1993	中里紀元	『秀吉の朝鮮侵攻と民衆・文禄の役(壬辰倭乱)』上・下	文献出版
277	1993a	三宅英利	『近世アジアの日本と朝鮮半島』	朝日新聞社
278	1993b	三宅英利	「朝鮮王朝後期官民の日本観」	荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史』V。東京大学出版会
279	1993	村田博史	「津市分部町の唐人踊り」	〔辛基秀編 1993 収録〕
280	1993	米谷均	「雨森芳洲の対朝鮮外交」	『朝鮮学報』148
281	1993	渡辺和敏	「朝鮮通信使の通行」	『静岡県史研究』9
282	1994	李元植	「祇園南海と朝鮮通信使」	『近代風土』44〔李元植 1997 収録〕
283	1994	姜在彦	『韓国と日本の交流史 近世篇』	明石書店
284	1994	金文子	「豊臣政権の日・明和議交渉と朝鮮」	『お茶の水史学』37
285	1994	佐島頼子	「壬辰倭乱講和の破綻をめぐって」	『年報朝鮮学』4
286	1994	辛基秀・仲尾宏編	『体系 朝鮮通信使』6・7	明石書店
287	1994	田代和生	「渡海訳官使の密貿易」	『朝鮮学報』150
288	1994	関德基	『前近代東アジアのなかの韓日関係』	早稲田大学出版部
289	1994	ロナルド・トビ	「外交の行列・仰列」	『朝日百科 日本の歴史 別冊 歴史を読みなおす』17。朝日新聞社
290	1995a	李啓煌	『『丁応泰誣奏事件』と日・明将らの講和交渉』	『日本史研究』389〔李啓煌 1997 収録〕
291	1995b	李啓煌	「和好交渉における朝・日の立場・態度」	『日本国家の史的特質』近世・近代、思文閣出版〔李啓煌 1997 収録〕
292	1995	李進熙・姜在彦	『日朝交流史』	有斐閣
293	1995	上田正昭編	『朝鮮通信使』	明石書店
294	1995	紙屋敦之	「大君外交と日本国王」	田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館
295	1995	金文子	「慶長元年の日明和議交渉破綻に関する一考察」	お茶の水女子大学『人間文化研究年報』18
296	1995a	辛基秀	「屏風、絵馬にみる朝鮮通信使」	〔上田正昭編 1995 収録〕
297	1995b	辛基秀	「祭りと朝鮮通信使」	〔辛基秀・仲尾編 1995 収録〕〔辛基秀 1999 収録〕



298	1995	辛基秀・仲尾宏編	『体系 朝鮮通信使』3・5	明石書店
299	1995	鈴木信昭	「李朝仁祖期をとりまく対外関係」	田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館
300	1995	武田恒夫	「朝鮮国王に贈られた屏風絵」	〔上田正昭編 1995 収録〕
301	1995	田代和生	「享保改革期の朝鮮薬材調査」	山田慶児編『東アジアの本草と博物学の世界』下。思文閣出版
302	1995	田代和生・米谷均	「宗家旧蔵「図書」と木印」	『朝鮮学報』156
303	1995	田中健夫	『訳注日本史料 善隣国宝記・新訂続善隣国宝記』	集英社
304	1995	仲尾宏	「朝鮮渡海訳官使と対馬藩」	京都芸術短期大学『瓜生』17
305	1995	河宇鳳	「朝鮮後期対外認識の推移」	『歴史学研究』678
306	1995	山本博文	『対馬藩江戸家老』	講談社選書メチエ
307	1996	泉澄一	「正徳元年の朝鮮通信使と大坂」	関西大学『文学論集』46-1
308	1996	片野次雄	『徳川吉宗と朝鮮通信使』	誠文堂新光社
309	1996	辛基秀・仲尾宏	『体系 朝鮮通信使』1・2	明石書店
310	1996	杉下元明	「南海の桃源郷」	『季刊日本思想史』49
311	1996	杉田昌彦	「『問槎畸賞』の序跋について」	『季刊日本思想史』49
312	1996	鈴木健一	「李東郭の詩二題」	『季刊日本思想史』49
313	1996	田中健夫	『前近代の国際交流と外交文書』	吉川弘文館
314	1996	徳盛誠	「唱和の世界の成り立ち—『鷄林唱和集』中の唱酬より—」	『季刊日本思想史』49
315	1996	仲尾宏	「壬辰・丁酉倭乱の朝鮮人被虜とその帰国・定住」	京都芸術短期大学『瓜生』19〔仲尾宏 2000b 収録〕
316	1996	中野光浩	「仙台東照宮祭礼の歴史的特質について」	『地方史研究』261
317	1996	貫井正之	『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』	青木書店
318	1996	日原伝	「岡島冠山と朝鮮通信使」	『季刊日本思想史』49
319	1996	堀川貴司	「唐金梅所と李東郭」	『季刊日本思想史』49
320	1996	堀口育男	「正徳辛卯朝鮮通信使と富士の詩」	『季刊日本思想史』49
321	1996	三宅英利	「朝鮮通信使研究小考」	『福岡県地域史研究』14
322	1996	米谷均	「近世初期日朝関係における外交文書の偽造と改竄」	早稲田大学大学院文学研究科『紀要』41-4
323	1997	李元植	『朝鮮通信使の研究』	思文閣出版
324	1997	李啓煌	『文禄・慶長の役と東アジア』	臨川書店
325	1997	泉澄一	『対馬藩藩儒 雨森芳洲の基礎的研究』	関西大学出版部
326	1997	紙屋敦之	『大君外交と東アジア』	吉川弘文館
327	1997	姜東燁	「一八世紀における韓日文化交流と宮瀬龍門」	『朝鮮学報』164
328	1997	北島万次	『豊臣秀吉の朝鮮侵略』	吉川弘文館
329	1997	田代和生	「近世前期朝鮮医薬の需要と対馬藩」	山田慶児ら編『歴史の中の病と医学』思文閣出版

330	1997	仲尾宏	『朝鮮通信使と徳川幕府』	明石書店
331	1997	信原修	「正徳辛卯信使の来日と詩文唱酬の実態」	『朝鮮学報』162
332	1997	ロナルド・トビ	『『毛唐人』の登場』	村井章介ら編『境界の日本史』山川出版社
333	1998	葛本一雄	「朝鮮通信使の廃絶と中井竹山」	『東アジア研究』21
334	1998	伍躍	「宝暦、明和年間の朝鮮通信使」	『東アジア研究』21
335	1998	佐伯弘次	椎葉地方と朝鮮通信使	『文明のクロスワード Museum Kyushu』60
336	1998	辛基秀	「朝鮮通信使を描いた日本の絵師たち」	上原兼善代表『朝鮮通信使および東アジアの漂流民をめぐる諸問題』1996～97年度科研報告書〔辛基秀 1999収録〕
337	1998	孫承喆	『近世の朝鮮と日本』鈴木信昭監訳、山里澄江・梅村雅英訳	明石書店
338	1999	池内敏	『『唐人殺し』の世界』	臨川書店
339	1999	金光哲	『中近世における朝鮮観の創出』	校倉書房
340	1999a	金光哲	「朝鮮使節—回答兼刷還使前夜—」	『史学論集—仏教大学文学部史学科創設三十周年記念』仏教大学文学部史学科
341	1999b	金光哲	「回答兼刷還使」	『東アジア研究』25
342	1999	佐島顕子	「日明講和交渉における朝鮮撤退問題」	中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館
343	1999	辛基秀	『朝鮮通信使一人の往来・文化の交流—』	明石書店
344	1999	高島淑郎 訳注	『日東壯遊歌』金仁謙	平凡社。東洋文庫
345	1999	田代和生	『江戸時代 朝鮮薬材調査の研究』	慶応大学出版会
346	1999a	仲尾宏	「朝鮮通信使使行録概説—『善隣と友好の記録 大系・朝鮮通信使』収録史料を中心に—」	京都芸術短期大学『瓜生』21〔仲尾宏 2000b収録〕
347	1999b	仲尾宏	「洛中洛外図屏風にみる朝鮮使節と耳塚」	京都芸術短期大学『瓜生』22〔仲尾宏 2000b収録〕
348	1999c	仲尾宏	「松雲大師と朝鮮復交」	『第三次四溟堂記念国際学術会議資料集』〔仲尾宏 2000b収録〕
349	1999a	米谷均	「『朝鮮通信使』と被虜人刷還活動について」	田代和生・李薫監修『対馬宗家文書 第I期 朝鮮通信使記録 別冊中』ゆまに書房
350	1999b	米谷均	「近世日朝関係における戦争捕虜の送還」	『歴史評論』595
351	2000	辛基秀・仲尾宏	『図説 朝鮮通信使の旅』	明石書店
352	2000	田代和生	「白石・芳洲論争と対馬藩」	慶応大学『史学』69-3・4
353	2000a	仲尾宏	「洛中洛外図にみる朝鮮使節と耳塚」	京都芸術短期大学『瓜生』23〔仲尾宏 2000b収録〕
354	2000b	仲尾宏	『朝鮮通信使と壬辰倭乱』	明石書店
355	2000	西村穂子	『日本見聞録にみる朝鮮通信使』	明石書店
356	2000	河宇鳳	「十七・十八世紀 韓国人の日本認識」	小島康敬・M.W.ステイール編『鏡のなかの日本と朝鮮』ぺりかん社
357	2000	米谷均	「一七世紀前期日朝関係における武器輸出」	藤田覚編『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社
358	2001	上田正昭・辛基秀・仲	『朝鮮通信使とその時代』	明石書店

		尾宏		
359	2001	京都文化博物館	『こころの交流 朝鮮通信使』	京都文化博物館・京都新聞社
360	2001	倉地克直	『近世日本人は朝鮮をどうみていたか―「鎖国」のなかの「異人」たち―』	角川選書
361	2001	杉仁	「在村文化の情報発信と朝鮮・中国―多胡碑文と在村学者の活動―」	『近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流』吉川弘文館
362	2001	高正晴子	『朝鮮通信使の饗応』	明石書店
363	2001	貫井正之	「壬辰丁酉倭乱および戦後の日朝交渉における惟政(松雲大師)の活動に関する考察」	『朝鮮学報』178〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
364	2001	貫井正之・小出裕・毛利正勝	「江戸時代、朝鮮通信使の基礎的研究」	『青丘学術論集』18
365	2002	李元植	「講和使僧松雲大師と日朝善隣外交」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
366	2002a	伊藤幸司	「中世後期における対馬宗氏の外交僧」	『年報朝鮮学』8
367	2002b	伊藤幸司	「現存史料からみた日朝外交文書・書契」	『九州史学』132
368	2002	北島万次	「壬辰丁酉倭乱前後の東北アジア国際秩序の変化」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
369	2002	金栄作	「松雲大師の加藤清正との外交談判」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
370	2002	高柄翊	「松雲大師と壬辰倭乱期と東アジア」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
371	2002	曹国慶	「明朝の将校劉綎と朝鮮の義僧松雲大師による協同抗倭戦争」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
372	2002	鄭柄朝	「松雲大師惟政の思想と仏教史的位置」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
373	2002	陳尚勝	「徳川家康と松雲大師」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
374	2002a	仲尾宏	「徳川家康と朝鮮・試論」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
375	2002b	仲尾宏	「朝鮮通信使関係資料・有形文化財資料所在調査報告(附 目録)」	京都造形芸術大学『GENESIS』6
376	2002	仲尾宏・李元植・辛基秀・吉田宏志・山路興造・山本尚友・菅澤庸子	「朝鮮通信使関係資料目録」	『青丘学術論集』21
377	2002	仲尾宏・曹永祿	『朝鮮義僧将・松雲大師と徳川家康』	明石書店
378	2002	河宇鳳	「国交再開期における松雲大師の活動とその意義」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
379	2002	閔德基	「壬辰倭乱前後の東北アジア国際秩序の変化」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕
380	2002a	米谷均	「豊臣政権期における海賊の引き渡しと日朝関係」	『日本歴史』650
381	2002b	米谷均	「松雲大師の来日と朝鮮被虜人の送還について」	〔仲尾宏・曹永祿 2002 収録〕